

第2章 生誕100周年によせて

同窓会の歩み

東京大学紫工会会長 瀬尾康久

我々が東京大学で学んだ学問分野の生誕100周年を機会に同窓会について簡単に振り返りながら最近の同窓会活動を紹介することにする。

昭和59年(1984年)に発行された東京大学農学部農業工学科八十周年記念誌によると同窓会が農業土木同窓会として創立されたのは昭和5年(1927年)のことである。農学科の中に農業土木学専修が開設されたのが大正14年であることを考えると、その最初の卒業生が巣立って間もない時期と考えられる。当時、同窓会活動の一つとして同窓会報の刊行があった。昭和6年から昭和15年まで17号の発行をみている。しかし、当時の困難な社会情勢のため会報の発行は中断を余儀なくされ、戦後昭和23年になってようやく同窓会が開催されている。その後不定期に同窓会が開かれていたが、昭和38年からは会員名簿が隔年発行され、昭和51年からは同窓会も隔年開催されるようになり昭和59年の農業工学科80周年祝賀会を迎えた。これを契機に、同窓会は会則を定め同窓会運営の体制を確立するに至った。以後、同窓会総会を毎年開催し会員に活動報告を行うとともに、総会のあと懇親会が開催されることとなった。また、同窓会報が昭和60年に45年ぶりに復刊され復刊1号、通巻18号として発行され、その後は毎年発行されている。復刊された会報の表紙のデザインは昭和7年に発行された同窓会報第7号のものを復刻し一部修正したものを使用している。今年2000年の会報は復刊16号、通巻33号である。

会則によると会長は専攻(学科)の教授中の年長者がこれにあたり、過去に白井清恒、小出進、志村博康、森嶋博、田淵俊雄、高倉直、中村良太、中野政詩先生が会長を歴任されている。

同窓会の名称は東京大学農業土木同窓会からその後東京大学農業工学同窓会と改称された(その時期は農業土木学科が農業工学科と改称された昭和23年と考えられる)。平成8年(1996年)の大学院重点化に伴う農学部改組以来、学生は生物環境課程の地域基盤工学専修と生物生産課程の生物システム工学専修(両専修を合わせて便宜的に6類と称している)に属することになった。また、従来学科は大学院に籍を置くことになり生物・環境工学専攻と改称された。これに伴い現在の学生にとって農業工学科という言葉は農業土木、農業機械とともに殆ど死語に等しく、従来学科名を冠していた同窓会の名称も学科制が廃止され、新たな名称を求める声が出された。これを受けて幹事会で議論を重ね平成11年26日の同窓会総会で「東京大学紫工会」が提案され、会員多数の賛同を得て新しい同窓会名となった(使用は平成12年4月から)。「紫」は東京大学農学部のシンボルカラーである。

同窓会の在学生に対する事業として、毎年卒業式の当日、卒業証書授与式終了後、同窓会会長から卒業生に竹中賞を授与し副賞として腕時計を贈っている。この賞は昭和59年に亡くなられた竹中肇教授のご遺族からの寄付金を基金に平成4年から始められた。当初は卒業論文を対象に選考されたが、その後学業成績で評価し選考するようになった。現在までに10名の卒業生がその荣誉に輝いている。しかし、この賞は基金を取り崩しており後数年には打ち切らざるを得ない状況である。

同窓会は、また、専攻(学科)への事業として、駒場で行われる進学振り分け説明会で使用する専攻紹介パンフレットの製作費用の半分を補助してきた。いわゆる進振り説明会は専攻への学生進学数を左右する最も重要な機会として専攻一体となって取り組んでいるもので、学生に魅力あるパンフレットを作ることに心がけ、数年毎に改訂を加え対応している。さらに、今回の100周年記念事業にも資金面からの援助もおこなっている。

生誕 100 周年によせて

駒場時代の思い出

庄司 英信 (昭和 6 年卒)

私が駒場の地を初めて踏んだのは昭和三年三月十六日で、受験の日であった。それはこの年、水産と農業土木専修だけに入試があったからで、三日に亙り数学と化学、物理と英・独語、口頭試問と身体検査が行われた。定員十五名に対し志願者三十一名、専修発足以来、初の入試とあって些か緊張させられたが、結局二十名との増員採用で、茲に待望の駒場人となれたのである。

大学の授業は四月十六日開始となったけれど、意外と休講が多く時間がルーズなのに之が大学なのかと、芝生に日向ぼっこしながら同僚と不満やら不安やらを託ち合ったものだが、こうしたストレスもいつの間にか野趣豊かで長閑な環境と駒場ののんびりムードとに同化されて、次第に薄れて行った。

二年生なって新入生歓迎コンパの時、田中先生から農業土木学会設立の話聞き、又専門科目の講義や夏期の見学旅行・現場実習等を通して、農業工学なるものの全貌が幾らか判ってき、勉学にも漸く身が入るようになった。

三年に進級した際、田中先生に農業機械方面へ進みたいと相談したら、工学部の聴講生になるよう手続きして下され、駒場と本郷との掛持ち通学となった。幸い駒場の方は時間表に余裕があったので、機械工学数科目の受講ができた。その夏休みには朝鮮での実習ついで満州見学旅行、更に鴻巣農試における二週間の農業機械実習と頑張り、卒論では農業土木の設計論文のほかに副論文として『溜池の浚渫機に就て』をものするなど、最終学年は実に多忙で充実した一カ年であった。

昭和六年の卒業時、先生の推薦で大学院に籍(二箇年)を置き、本格的に農業機械学を専攻することになったが、当時の大学院は今とちがって入試も単位もなく、全くの自主的な自由研究であって、端的に言えば研究室に残る一手段のようなものであった。併しその頃は研究室と云っても未整備な一講座の学科とて、研究施設らしいものは殆どなく、農学本館玄関脇の一隅に席を与えられて、そこで只管乏しい文献による独学的自習に終始するしかなかったのである。

一方、湖口をしのぐため、五月末から授業補助嘱託(月給七拾円)にして貰えたが、仕事としては第二種や第三種講習の農業水利学・応力・農道の授業であって、専門的には広部先生の計量製図の手伝いと農学実科の冬学期週二時間の農具論を受持ったにすぎない。従って実際の研究としては之等雑務の合間に文献漁りをする不安定な心もとない状態であった。然しこの間、一度夏休みの二週間を北海道新冠牧場で実習したこともあって、そこでは牧草の刈取収納の畜力機械化作業を体験したが、そんなある日、所員等と馬に乗って熊の出ると云う山にピクニックの遠乗りをした事は、終生忘れ得ぬ楽しかった思い出である。

ともあれ、前述したような孤愁の研究生活に耐え、之を支えたのは既に先進していた欧米に於ける農業機械化の魅力であって、早晚わが国にも必ずこのような事態が招来されるとの期待の夢があったからに他ならない。

この時期、世は満州事変から国際連盟脱退に発展し、非常時が叫ばれ出していたが、それでも巷には東京音頭やヨーヨーが流行し、車公害もスモッグもなく、悠々街の散歩が楽しめたのだから、まだまだ古き良き時代の名残りがあったと言ってよいかもしれない。

かくして、やがて昭和十年、専修は農業土木学科と独立し、私もやっと大学助手(六給俸)に任命され、続いて本郷移転となって、茲に農業工学発祥の古里 駒場にもおさらばしなければならなくなった次第である。

(九・二九 満 96 才の誕生日)

農業土木回顧偶感

緒形 博之 (昭和 16 年卒)

私が東京帝国大学農学部に入學して、初めて農業土木を学んだのは昭和 14 年(1939)の春だった。その頃、日本は人口の増加に伴い、主食である米を海外から補給しなければならなかったので、米の増産は国の重要な課題で、開墾、干拓、灌漑、排水など中小の工事が全国の各地で実施されていた。しかし、これらの仕事の多くは、古来の日本の伝統的な技術によっており、現場の技術者が頼りにした参考書は、既に施行された地区の事業計画書だったようだ。私たちが大学で学んだ農業土木も、あまり体系化されない、個々の技術知識の寄せ集めで、まとまった本もなく、学生にとってかなり高価な、「物部・水理学」が最も重要な参考書だった。戦前の農業土木の前近代的な姿は、昭和 6 年刊の黒表紙の「農業土木ハンドブック」をみれば、おおよそ推察できる。

戦後、食糧事情の逼迫に伴い、米の増産に多額の資本が投入され、愛知用水、八郎潟干拓など大規模な用排水事業を始め、各地で多くの機械化された近代的な農業土木工事が実施された。それらの現場では、さまざまな問題が次々と湧き出し、対策、解決を求められた。これに刺激されて農業土木の学問技術も、戦後急速に進歩した内外の学術を取り入れてながら、その内容を充実し、次第に体系を整えていった。その成果は、その後に編集された「農業土木ハンドブック」、「土地改良事業計画設計基準」にまとめられた。設計基準の制度はアメリカの開拓局を真似たものだが、これが戦後の農業土木の進歩に、とても寄与したと思う。

この中で、今から見て、農業土木らしくて面白いのは、<減水深>と<許容湛水深>である。これは、農業水利事業計画を作る場合に、水路やポンプなど主要な構造物の大きさを決める基本となる数値であり、ほとんどの用、排水事業で使われていた。ところが、この用語の概念は、一枚ごとの水田圃場について適用できるものであって、事業計画の対象となるような広い空間では、各圃場ごとに、土質や地盤高がそれぞれ異なるので、これを一括して取り扱うには、これらを代表する値を決めなければならない。しかし厳密な計算は手数もかかるし、事業計画をたてるには、この値の他に、<有効雨量>、<計画基準雨量>など精度のかなり低い数値と組み合わせて使うのだから、こちらだけ精密に計算しても、あまり効果がない。そこで実際には、その地区の代表となる、ほぼ平均的な値を採用して、事を運ぶことが広く行われていた。こんな大まかな数値を基にして、工事予算が算定されるのだから、大らかな話だが、世の中の物事はある許容幅の中で、うまく動いていくものである。このような弾力的なやり方を採用した先輩方の知恵には感心する。今流行のインターネットの仕組みもそうなっているらしいが。

二十世紀の幕が下ろされようとしているいま、来し方を振り返ってみると、この百年に我われの仲間が刻んだ鑿の跡は、確実に日本の土地に残っており、来たるべき世紀に伝えられるだろう。しかし、形あるものは必ず滅するというが、いまや大きな時代の転換期を迎えて、あちこちに草の生い茂った 美田 を見るにつけて感じる、この遺産は果たしてどこまで風化に耐えるだろうか。

環境地水学への期待

八幡 敏雄 (昭和 18 年卒)

今から思えば、東大在任中にやって来たことと云えば、ガラスの筒に砂だのガラス玉だのを詰めて模型土壌とし、それに水を灌いだり排水したりして水の挙動を調べるといような実験を飽きもせずに行っていたような気がする。挙句のはてに、そのような方法で得られた諸々の知識を整理して「土壌の物理」として公刊し、それがまた若い学生諸君に結構もてはやされたのだから我ながら呆れる。

自然物としての土壌がそのように単純なやり方で分るものではないことは私が退職後、農学科しかない私立大学に移ってから後ではじめて分ったことなのであった。つまり私の書いた「土壌の物理」の「土壌」は云わば「サンプル土壌」ないし「実験室土壌」とでも云うべきものであったのである。

二十一世紀の化学技術者には地球規模において私たちの命の安全を害しつつある幾多の問題の解決に積極的に貢献する社会的責任があり、昨年秋の日本学術会議の「科学技術の発展と新たな平和問題特別委員会」でも地球環境破壊はまっ先にとり上げられたテーマであったと云う。(「土壌の物理性」第84号所載の田淵俊雄氏の報告を参照のこと)

このような時期に母校の農業工学科が装いを新たにして「農学生命科学研究科生物・環境工学専攻」としてスタートを切ったことの意義は真に大きい。私の「土壌の物理」の代りに宮崎教授は早速「環境地水学」を出して呉れた。

今後の新しい地水学の発展がとても楽しみになって来た。(2000年9月30日)

農学部紛争の一コマ

立花 一雄 (昭和18年卒)

私の在職時は大学紛争に明け暮れた時代であった。ことに、安田講堂の攻防のあと、農学部の紛争は激化した。教授会の最中に紛争側の教職員学生(共斗)に乱入され会議室を占據されたこと、校門に共斗が見張りを立て教授会メンバーの入構を阻止した日々、学外で開き続けた教授会など今でもその光景が目に見え、農学部では松井学部長を中心とする学部長室のメンバーが日夜大変な苦勞をされたが、農業工学科からは緒形、細川、森嶋、竹中の諸先生がこれに参画され正常化に尽瘁された。これらの方の御努力が実を結んで、会議室から共斗を追出し学内で教授会を開けるようになり、農学部の紛争は次第に鎮静に向う。その間、とくに共斗が教授助教授の入構を阻止し続けた期間、私どもは何とか工夫して学内に入り、紛争側に属しない所謂ノンポリの学生に講義を続けることが大切であった。私は共斗が毎朝見張りに立つ前の8時頃入構することにしたが、他の方々も方法を工夫して入構し、講義は続けられた。

紛争への対応をめぐって、農業工学科は学部内で異端視されたように思う。それには幾つかの原因があるが、農工人事ルールもその一つであった。教授助教授の選出に当っては教授会で定められた選考ルールがあるが、紛争中、学科内でこれと異なる農工ルールを定め選考した候補者を教授会に推薦することとした。特に立候補制としそれ以外の人を選考の対象としないこと、選考の会議を教授会ルールと異なる範囲に拡大したことが問題視された。このルールは環境調節工学の教授人事に適用されたが、私は立候補しなかった。教授会人事は学部全体の問題だから、紛争に際して一学科だけでルールを変えるのは筋違いである。この方式がどのように見られていたかは、このとき推薦された候補者が教授会で異例に多数の批判票を浴び否決されたことから明らかであろう。その後、緒形先生ほかの先生方の御苦勞により農業工学科は正常に向い、私は教授会ルールに従って昇任させていた。といた。

東大紛争は安田講堂の攻防で終わったように伝えられ、農学部紛争は歴史の外にあるが、以上は私の関係した中の一コマである。紛争について語ることはまだまだ多いが、時代の流れの微小な一断面に過ぎない事実が思い出になっていることを寂しいと思う。正常に仕事のできる学園の永続を期待したい。

生物環境工学科に寄せる

細川 明 (名誉教授)

先ず、農業工学科百周年と生物環境工学分野に乾杯。

瑞穂の国日本の歴史的悲願であった米の自給が、挙国一致の努力で、戦後20年余で達成された。農業工学は開田、干拓事業、水利網や耕地の整備、農業機械化等で大きく貢献した。しかし、八郎潟で米の生産が始まった昭和四十三年頃、既に米は生産過剰になった。私の友人は空知で15町歩の水田を経営しているが、4町歩が休耕田だ。何処かが狂っている。効率第一の水利用では、コンクリートで固められた水路、ダム建設、河の堰、何れも自然環境に優しくなかった。

旧ソ連時代のフルシチョフ首相主導のアラル湖(北海道の面積の 8 割大)利用による灌漑農地開発は今世紀最大の環境破壊と言われる。今日、アラル湖は九州大の砂漠と化し、豊かな漁業や湖畔の漁村が消え、灌漑農地は塩害で生産力が半減し、砂漠化の道を辿っているという(1)。幸い国土の小さい日本では、このような環境の大破壊を見ないでいる。

農業機械は農民を耕起、田植、収穫・調製の重労働から解放した。しかしアメリカでは、肥料、農薬を大量に投入して穀物類などを安価に生産する、大資本による大農場経営が始まった。その結果、アメリカから農家や農村が姿を消した。米国では国勢調査項目から農家が消えたという(2)。また生態系を守る大切な林業は、チェーンソーによって、パルプ生産業と化した。

地球規模で砂漠化が進んでいる。トンボや蛍が姿を消したように、森林や生物が消え、農家、農村が消えてゆく。安価な農産物は競争力のない途上国の農業を破壊し、農民を都会のスラムに追いやり、貧困問題を深刻化させている。

自然環境と人との、また自然と農業・林業との調和の回復や修復、人と人との平和共存の基本となる食糧の生産のために、21 世紀に向かって改組された生物環境工学分野に、大いなる活躍と成果とを期待して止まない。

官吏養成を目的として発足した日本の大学でも、大学は真理探求の場、人類平和のために知識を活かす智慧の府であろう願ってきたように思う。今、もし大学が智慧よりも利をとる場となるなら、大学は学問の砂漠化の道を歩むのではと案じるのは、私のノスタルジアであろうか。

1. 石田紀郎, 消えゆくアラル海と向き合って, UP No.334(2000 年 8 月号), 東京大学出版会
2. Wendell Berry, Another Turn of the Crank, Counterpoint, Washington, D.C., 1995.

教授遍歴を終えて

白井 清恒 (昭和 23 年卒)

私は、昭和 23 年卒業後、三重大学(当時は三重農専)に採用され、約 30 年勤めた。その間、転職したいと思ったことも再三あったが、少なくとも勤続 20 年を越えた頃は三重に骨を埋める気になり、50 年 5 月農学部長に選任された。その直後、東大竹中教授(当時、故人)から電話があり、東大へ来ぬかということ、私としては身に余る光栄ではあるが、以上の事情から固辞した次第である。その後も東大の勧誘は続き、併任ではどうかと言われると辞退する理由は見出せず、51 年 2 月東大教授併任となった。この併任は 2 年間続き、幾多の紆余曲折を経て 53 年 2 月本務となり、爾来、61 年の停年を迎えるまで、8 年間勤めた。この間、関係各位のご厚情にすぎり、多大のご迷惑をかけたが、果たして当初のご期待に添い得たかどうか、内心、忸怩たるものがある。

停年後は 2 年間の台湾大学客座教授を経て東京農大嘱託教授(平成 8 年まで)となり、結局、48 年間(併任を含めると延べ 50 年以上)四大学にわたり勉強する機会が与えられた。このことは私にとっては貴重な経験であり、直接お世話になった方々、とくに、端緒を作っていたいただいた東大の皆様に対し、感謝の念を禁じ得ない。

四大学を通じて、教育・研究の場であるということに差異はないが、その具象化に当たっては各大学それぞれの特色をもっている。管理運営・教育内容は勿論、農業工学研究の具体的目標さえも各大学独自のものが含まれている。これは、その大学の過去の歩み、即ち、履歴の影響が大きく、大学の口 - カル色とも言えよう。A 大学での常識がそのまま B 大学でも通用するとは限らない。従って、転勤等による新入りの者に対し要求されることは、まず、折角の過去の口 - カル的な経験を普遍性のある能力ポテンシャルにまで昇華することである。次いで、個人よりも遙かに永い履歴をもつ新任地の口 - カル色を把握する事である。この両者を果たし得なかったことに非力を痛感している。

農業であれ、環境保全であれ、口 - カルとしての風土に関わるものである。農工から環境へと発展する

にあたり、風土の特色を理解した上で、過去 100 年にわたり蓄積されてきたポテンシャルを活かそうと努力するとき、今後の発展が約束されるであろう。

青春、山崎先生そして研究者

中川 昭一郎 (昭和 27 年卒)

私共が東大農業工学科に入学した昭和 24 年頃は、まだ戦後の混乱が収まらず、学生は皆貧しく腹を空かしていた。しかし、そんな中でも若者達は勉学や学生運動、そしてスポーツやアルバイトに精を出し、それぞれの青春を楽しんでいたように思う。私も勉学は二の次にして、高校時代からの陸上ホッケーを楽しみ、時にはデモに顔を出し、そして家庭教師を 2 軒勤めるなど、今にして思えばよくもまあ好き勝手なことをやっていたものだと思ふながら感心する。

そんな中で三年生になり、新任の山崎不二夫教授の講座（後の農地工学研究室）に属して卒論を書くことになった。テーマは開墾地の抜根に関する研究。ブルドーザのない時代、抜根は大きな技術課題だった。先生から、早く根を燃やす焼却抜根と早く腐らす腐朽抜根の参考文献を渡され、無我夢中で本を読み実験をしたのが、私の大学における唯一の思い出に残る勉学であった。

卒業後、農水省の研究機関において水田の整備などの研究に従事し、何とか一人前の研究者になれたのも、この卒論の経験とその後も引き続き教えを受けた山崎先生のお陰だと思っている。そして現在、先生が 25 年前に創設された山崎農業研究所を私が引き継いでいるのも、そのご恩返しの一つであり、ユニークな農業・農村関係のシンクタンクとしてさらに発展させたいと願っている昨今である。

時代とともにその姿は変わっても、農業工学科は卒業生一同の青春の城であり、今後の 100 年がさらに充実発展することを願って止まない。
(株)山崎農業研究所代表)

上野先生の「耕地整理講義」を手本として

小出 進 (昭和 30 年卒)

東大から「上野先生の著書の耕地整理講義が、研究室から無くなっているが、持っていったのは君ではないか」との電話が、当時、宇都宮大にいた私に、かかってきたのには驚ろかされた。しかし、私が大学院生の時に「耕地整理講義」を愛読していたのを認め、あの名著を持っていったかもしれないと思われたのは光栄である。

その時より二十年位前になるが、大学院で、新沢先生の指導で、耕地の区画整理の研究に取り組んだ。一、二地区、実地調査をした後で、上野先生の「耕地整理講義」、伊藤悌蔵の「耕地整理論」、酒匂常明の「土地整理論」の章節を書き出し、論文の構成を考えた。調査をすると農家は、区画整理をする理由として、どこでも農道不足をあげていた。農業を機械化するためである。したがって、農道を第一章とし、用排水、区画、換地と検討し、農地整備方式を組み立てることとした。ただし、[耕地整理講義]が、水路論で始まっており、別の構成にしたい意識があったことは否定できない。

数年後、区画整理が一応まとまり、新沢先生に根本的に手を入れていただき、共著で出版することになった。そこに干拓地の農地を加え、山崎不二夫先生に説明した。先生が「干拓地の農道の方向は」と質問されたので、「水路に沿わせませぬ。水路は水の流れる方向です。」と答えた。先生は「わかった。」と言われた。そこで、愕然とした。すぐに、「耕地整理講義」を読み直した。数年前のことなので、その構成を忘れていた。「講義」は、水路論で始まり、道路論、耕地区画論と重ねて、耕地整理方式を論じている。水田は、水があるから水田なのであり、整理方式は、用排水を基本として論ずるのが、理論的であると、あらためて、「耕地整理講義」に感服した。出版直前の著書を書きなほそうかと考えたが、実地調査を重ね、農家の農道重視の意向を反映しており、あわせて、これからは労働生産性重点の農地整備であると考え、構成を

そのままとし、新沢先生と共著で「耕地の区画整理」を岩波から昭和38年に出版した。

この著書は、当時の零細経営、農地分散を基としている。新沢先生は言われた。「この本は保守的であると批判されるだろう。しかし、それは、それがかまわない。」

昭和30年の一卒業生から

森嶋 博 (昭和30年卒)

母校は大学院大学となり、学部の方はおまけの存在になっただけ。国立大学の独立法人化という影がちらちらと見え隠れするが、農業工学が今発展のさなかにあると考えるなら、これもめでたい話と慶んで良いのだろう。

他の時代のことは言えぬ。少なくとも我々の世代は、戦後の最も自由な時代を過ごし、日本が敗戦国から世界一の経済大国になったと自惚れるまでの、いわゆる高度成長の時代を担ったと信じたい。しかしこの間を振り返って見ると、学科にとっては必ずしも平坦な道ばかりではなかったと思う。

自分が過ごした時代だけを見ても、農業工学科に何度か大きな危機があった。その最初のもは、新制東京大学になったときだろう。昭和28年、本来なら旧制東京大学の最後の卒業生に加えて、新制東京大学の第1期の卒業生を送り出すべき時に、わが学科は送るべき新制の学生がいなかった。当時の先生方は大変な危機感を持たれたのに違いない。苦肉の策として、第2期と3期、昭和29年・30年卒業予定のクラスは、大英断で駒場の課程を経ない者に対しても、学部で独自の試験を施行して欠員を補った。いわば私どものクラスは学制の隙間から出来たと言ってよい。今の人たちには信じられなからうが、東北大学、大阪大学を始めとした現役の医学部在学者が3人いた。一高、二高、東高、静高、浪速高など旧制高校1修者もいるし、高等農林や薬専、師範を出た者もいた。駒場からは理一理二ほぼ半々、さらに他の国立大学在学中の者が加わり、おまけにストライキを主導したとして罰を受けた勇士が上のクラスから2人も天降ってきて、総勢22名、まことに雑然とした、しかも気が合う集団にまとまったのである。

飢えた時代である。農食で人造米の昼飯を食うにも外食券が必要な頃だ。それを受けてわが学科の五月祭のテーマは「米は絶対に自給できる！」だった。あまり張り切り過ぎて、1号館の地下の実験室一杯に、大干拓+ダム、頭首工、水路もあり、見事に耕地整理された農場には牛が寝、トラクタが走り廻っている大きな模型をコンクリで部屋一杯にこねあげ、泥絵の具を塗って仕上げたまではよかったが、当然、五月祭が終わったときにはこちこちに固まって動かすことも出来なくなった。要するに貴重な実験室を一つ、完全にコンクリで固めて使えなくしてしまったのである。多分教官会議で大問題になったのに違いないが、心優しい先生方で、この件で叱られた学生は誰もいなかった。

時が流れて、教員として母校で各学年を36年間眺めることになる。身びいきかも知れぬが、一口で言えば、われわれのところは、皆が互いに引き立て合い、一番仲良くまとまったクラスの一つではなかったかと思っている。

学科の話に戻る。時代の流れと言える東大紛争、弥生キャンパスでの臨職紛争などに際しては、良いか悪いかは別として、わが学科は組合系の勢力が強く、力関係があって、他の学科ほどの危機感を持たないで過ごせた感があった。後日それが危機を招く。

前後するが、今振り返って学科の最大の危機と思う事件は、教員の選考に際し、教授から助手まで全員参加で決める方式とし、該当講座の助手が事実上の委員長として直上の上司に当たる教授候補を選考、教授会に上程・推薦し、これが圧倒的多数で否決されたことだろう。悲劇は、大部分の学科メンバーは何故否決されたか、いくら考えても判らなかつたところにある。そのあとの処置と対応は、80年史にある、緒形先生の書かれた苦渋に満ちた紛争の梗概のとおりである。

ポスト争いで、自分の言うとおりにしないなら、あらゆる手段をとって徹底的に戦うと教官会議で宣言し、学科や学会、学部を巻き込み、マスコミまで使った大騒動があり、「いま学科はどうなっているのだ」と問い合わせが殺到する大危機となったのは切ない事実だった。私はある時点で一件落着と信じ、在外研

究員として渡米してしまった。帰国してなお深刻な状態が続いていることを知り、学科のため、学会のために苦勞されている細川先生を肝心のときに補佐せず、申し訳ないと思う限りである。

再び前後するが、学科は時の流れにより、農業土木・農業機械の2専修制をとり、昭和41年春に第1回の卒業生を出した。この制度は四半世紀続き、使命を果たして、学科1本にまとまろうという結論に達し、その幕を閉じた。幕引きに際し、かつて掲げた最初の理想にどの位近付けたのだろうかと思ふものがあるが、傍目に見ても大学院の諸君はよく頑張るようになったと思う。

母校奉職時代の終わりの頃のことである。学科主任として駒場に進振りの客引きに行かせられた。パンフレットを作り、宣伝あい勉めるがお客は集まらない。その頃は林産・農工・水産が不人気3家で、学科主任同士、顔を見合わせてため息をついた。そして、新制第1期や2期の進振りのとき、当時の主任の先生方はどう感じたろうかと思いを馳せたものである。

さて大学院農学・生命科学研究科が本体になった今日、風の便りでは、われわれの専攻はなかなか人気があって、大勢志望者が来るそうで、安堵の胸をなで下ろしている。是非、頑張って花を咲かせて頂きたい。一つだけお願いがある。「事業さえ残れば農業は滅びても良い」などという人の養成所にはならないで欲しいと言うことだ。環境破壊工学科にだけはなつて欲しくないものである。もしそんな危惧を抱かせる流れがあるとすれば、学科は今も重大な危機に直面しているのではなからうか。

7号館時代に期待する！

田淵 俊雄（昭和32年卒）

100周年おめでとうございます。

小生はその五分之一、約20年を教官として過ごしました。昭和32年、大学院を中退して助手になり、教わらなかった土質実験と演習を担当したのが仕事の始まりでした。「地水」と「農産」の2講座が新設されて、4号館も建設され、学科は大いに盛り上がっていました。

学科の運営方法やカリキュラム、研究のあり方など、助手の人たちからの問題提起によって学科の改革が行われ、研究教育が活性化しました。農業の機械化の時代を迎えて圃場整備が重要な課題になっていましたが、学科全体に及ぶ共同研究が活発に行われました。東大、教育大、農工大の3大学による野球大会もスタ-トしました。今でも続いています。本当によく続いていると感心します。その後大学紛争の時代に入りましたが、農業工学科は比較的平穩であったのは、このような和の雰囲気できていたからだと思ひます。

私は昭和47年に茨城大学に転出し、18年後の平成2年に農地工学講座に戻りました。上野先生に始まる田中、山崎、新沢、竹中、小出の各教授に続く7代目になります。戻って一番驚いたのは駒場の教養からの進学者が激減していたことです。定員は満たされず時には一桁の学生数でした。学科の存亡に関わる重大事と認識し、皆さんと学科の広報に努力するとともに、教養の授業に全力を傾注しました。幸い徐々に進学生の数が増え、最近では第一志望の学生で定員一杯という信じられない状況になりました。学生あつての学科・専攻ですので、これからも油断することなく努力して欲しいと願ひます。またこの時期農学部の評議員に思いがけず就任し、大学院重点化という大仕事にたっぷりと時間とエネルギーを使うことになり、研究の方が思ふ存分できなかつたのが心残りです。

退官直前には7号館建設がやっと実現しました。4号館の老朽化が激しく、キレツが入るなど危険な面もあつたので、若手の教官から「こんな建物だから学生が来ないのだ」と突き上げられていたのでほっとしました。しかし4号館時代を築いてきた者としては、4号館を取り壊すのは何とも寂しかったのが本音です。これからの21世紀は7号館時代です。ぜひとも素晴らしい7号館時代を築き上げて下さい。

農業工学から生物・環境工学へ 100 年の輝き

中野 政詩 (昭和 36 年卒)

農業工学から生物・環境工学へ 100 年の歴史を携えての新展開を心からお喜びを申し上げたい。私は、昭和 34 年に農業工学科に進学し農業水利学研究室を卒業した。大学院生活は途中で切り上げて農業地水学研究室の助手に採用され、土壌の水に関する研究者の道を歩いて農業工学に携わってきた。振り返ると、学生のとき五月祭の出し物として八郎潟干拓による農地の創出と近代農業の形態を究めてみようとする農業工学の姿を教室に展示したことが真っ先に心に浮かんでくる。続く農業構造改善事業の担い手としての農業工学の姿も強烈な印象として残っている。私は、そのときに、国民の食料をどうやって賄い、社会を支える根元的な富をいかに蓄積し、我が国の力をいかに強くしていこうかと真剣に考えてこうした事業が営まれ、農業工学がそれをしっかりと支えていることを学んだように覚えている。それから 41 年の歳月がすぎたが、農業工学はずっとこの目的意識を持ち続けて学術として深化し、責任を負う範囲を広げてきたように今あらためて思う。

近年になって世界人口爆発の圧力と関連して食料を賄う道は様々に考えられてきた。肥料の改良でもよい。作物の品種改良でもよい。バイオテクによる工場生産もよい。海外の土地や水を使って輸入という手段に頼ってもよい。しかしそれで本当に我が国や開発途上国の潜在富やよって生まれる国力の蓄積を可能とするような食料生産ができるだろうか。国際社会の 1 員としての食料生産の責任が果たせるのだろうか。結論を今出すことは性急すぎるとは思うが、ごくごく最近になって上記のいずれの手段によってもそれでは無理であるという悲観的な見方が諸処で囁かれ浮上しつつあると聞く。それでは何がと問えば、食料生産面積の拡張を中心軸として進め、生産環境と生産手段、並んで生産物の貯蔵・流通・加工の知恵に結局のところ頼らざるを得ないという答えである。それではと云ってかつてのようにただ農地面積の拡張だけがむしゃらに進めればよいと言う訳にはなるまい。生産環境整備もさりながら、自然保護もあろうし、生活環境向上もあろうし、農家設計もあろう。広い意味の都市設計も関わってくるであろう。その中でどうやって農地面積を拡張することが出来るだろうか。農業工学の中での自分史でもう一つ学んだことがある。農業工学を食料生産というこの 1 点に凝縮してみると、農業工学は社会のための学術であり、社会を俯瞰してあらゆる社会的事象の均衡をはかり、科学を俯瞰してあらゆる科学の成果を内に秘めて形成された学術の典型的なものであったと言うことである。こうした伝統を担って農業工学から生物・環境工学へ展開するとき、農地面積の拡張を中心軸とする食料確保に向かおうとする国際的な時代感覚の国内・国外展開に応えられるようになるかもしれないと密かに思う。

いま改めてこの分野の学術が求められる機運にあるのかと感じるとき、これからの生物・環境工学が農業工学の 100 年を礎にいつまでも社会のための学術であり続けられるような新鮮な体系の輝きを一層磨き築かれるように期待したい。

一世紀

高倉 直 (昭和 37 年卒)

一世紀前に上野英三郎教授は今日の東大、生物・環境工学専攻の姿を想像できたであろうか。同じように私にはこの先、一世紀後のその姿は想像だにできない。

国立大学だけでなく、我が国の大学はすべて再編期に入っている。東大退官後、一地方の国立大学の管理職を務める現在、毎日のように改革や評価に関する会議が続く。すでに国立大学の独立行政法人化が決定している。それにつれて、恐ろしいほどの早さで変化を要求されているというのが実状である。比較的歴史の浅いアメリカの大学に比べても一世紀の遅れがある我が国の大学のシステムをそのアメリカのシステムに近づけようとする動きにみえてならない。アメリカの 2 大学の Adjunct Professor として、ほぼ毎年講義も行っている経験からすると、あまりにもすべてが違いすぎるし、我が国の動きが極端である。ア

アメリカでは tenure track といって、若い助教授が5年程度の任期制を通過する必要があるが、それ以上のすごいシステム、すなわち、すべての教官に任期制を導入する大学が現われている。どこまで一世紀先をゆくアメリカを研究し、かつ我が国の実状にあわせようとの努力がされたのであろうか。今討議されている教官個人評価に関しても、スーパーマンを要求するようなものが話題になっている。アメリカでは研究80%、教育20%の教授がおり、一方、普及活動90%研究10%の教授がいる。ところが、我が国では研究、教育、管理・運営、社会貢献の4分野すべてで合格点をとる必要があるというような案が検討されている。大学にはすばらしい管理能力のある教授が居てもいいし、管理能力はなくてもノーベル賞がとれるような教授がいるのがアメリカである。訴訟が多いのもアメリカである。授業が難しすぎたから成績が悪かったと学生に訴えられた教授が敗訴した。評価が厳しくなれば同然ながら不利になった側は不服を申し立てるであろう。情報の公開もそれに拍車をかけるであろう。

授業の後、今まで自分が受けた授業で一番すばらしかったと握手を求めてきた学生、クラス全員でワインを最後の講義の後、贈ってくれた若者達、お疲れさまと講義の後、近くの酒場でビールをおごってくれたクラスなど、思い出がつきない。一世紀後には東大でも見られる姿なのであろうか。

大学における技術者教育を考える

大橋 欣治 (昭和39年卒)

21世紀を目前にした今日、大学における技術者教育や技術者の資格制度、技術者の継続教育について、広く議論されている。これらの議論に参画する機会が与えられたが、その中で感じたことを少し述べてみたい。

この内、大学の技術者教育については、「学問としてのエンジニアリングの教育」から「人類社会に役立つ技術者の教育」へ発想を転換するとともに、国際的な整合性を持つ教育プログラム（カリキュラム・スタッフ・施設等）の導入を図るというものである。この教育プログラムを第三者機関（日本技術者教育認定機構＝JABEE）が、関係学協会の協力、連携のもとに審査、認定する。そして、これが、これからのわが国の「技術士」資格や国際的な技術者資格（APECエンジニア）の基本的な前提になる。

農業土木学会は、農学系学協会の中でいち早くJABEEへの参加を表明し、分野別プログラムの認定基準、審査基準づくりなどの検討作業を進めている。これらを通じて、改めて農業土木の基本的なコア体系（近年ニーズの高まっている管理、農村環境等を含む）の見直しが進められている。近年、各大学において、従来共通であった農業工学や農業土木という学科名称が変更され、環境、資源、地域、生物、生命、システム等のワードを組み合わせた様々な学科名称になっている。このような中で、改めて農業工学や農業土木のコア体系を再構築することは、大変意義のあることである。

ところで、私が東京大学で学んだ1960年代は、教養を広く身につけることが比較的重視された時代であった。国家公務員試験における一般教養問題のウエイトも高かったと記憶している。従って、私の場合は、農林水産省に入省して、いわゆるOJTで実際の専門技術を身に付けたり、新たな技術分野を切り開いたという実感が強い。従って、大学では広い知識と基礎的な技術力を身に付けておけば、実社会に出ても社会や時代のニーズの変化に柔軟に対応できる応用力を持つことができるのではないかと、今でも思っている。そんな自らの考え方の矛盾を抱えながら、JABEE制度等に取り組んでいる。

もう一つは、司馬遼太郎の『NOUGYOU - DOBOKU』という表現のような、わが国における農業土木の特異性である。技術者教育や技術者資格の国際化の中で、「農業土木」をどう位置付けていくのかという問題である。当面、わが国と比較的同じような教育体系や農業条件を持つ近隣諸国との連携を図ることが重要であると考えている。

研究会議という組織

山路 永司 (昭和 53 年卒)

1. はじめに

農業工学科の伝統として民主的な運営が上げられる。昭和 40 年代はその民主化が花開いた時期と言えよう。その象徴が「新体制」であり、ここで述べる「研究会議」である。前者は非常に斬新な方法論であり、斬新すぎるゆえに賛同と批判とが相半ばしていたため、寿命はそれほど長くなかった。

筆者はその民主化が既に確立して以降に院生となった、いわば出遅れた世代であったため、少し上の世代が輝いて見えたものである。そして、折りにふれ、いろいろと教を乞うことになった。本稿は、その頃教わった話を思い出しながら、また 78 年から 99 年までは研究会議のメンバーとして関わったことについて、そのいくつかを記録にとどめておくこととした。

2. 研究上の平等

研究会議の構成員は、農業工学科(96 年からは生物・環境工学専攻)において研究に携わる者、すなわち教官・技官・院生そして研究生である。入学したばかりの院生にとっては、修士課程の先輩はいろいろなことをよく知っているし、博士課程の先輩は堂々とした人たちだし、それだけでも怖じ気づくのに、何と、技官の方たち、助手の先生、助教授の先生、教授の先生とも、研究の上では平等だということである。この平等の理念に基づくと、研究上の発言は平等であるという(これは多くの社会でかなり常識と言ってもよいだろう)ことに加えて、研究費は身分に応じて自動的に配分されるのではなく、研究計画に応じて配分されるという理念につながってくる。現実には、経験の乏しい院生が良い研究計画をつくることは困難であるため、身分に反比例して研究費が配分される、などということにはなかったが、若輩の頃は、いい研究計画をつくろうと、力不相応の努力をしたものである。

研究上の平等という理念は、全構成員が平等であることに加え、伝統ある講座制でさえも、必ずしも既定の優先されるべき研究組織であるとは、自動的に認められなかった。研究組織は、旧来の講座をベースとする K グループと、テーマに基づき随時作られる G グループとで構成された。初代の G グループである G 1 は「機械化に伴う農地整備」を研究したが、研究としての水準の高さに加え、農業工学科の精鋭が研究室の枠を超えて総力で取り組んだ成果であることを忘れずにいたい。

3. 研究会議の行事

研究会議では、年 1 回の会議で、旧年度の研究成果を確認しあい、新年度の研究計画および予算を議論する。また構成員による / 構成員の主催する不定期の研究発表会、M 2 生による修士論文中間発表会、D 3 生あるいは研究生等による博士論文中間発表会を行っている。

近年、不定期の研究発表会が大幅に減少している。そのテコ入れも兼ねて、7-8 年前に幹事会が「懇話会」を創設した。ガチガチの研究ではなく専門外の人にもわかりやすい(例えば海外調査報告など)発表のあと、缶ビールなどを飲みながら語り合うという企画である。

ところで、専門性の高い研究は、出席者がどうしても限られてしまう。そこで少しでも敷居を低くしようと、初めて幹事を務めさせていただいた院生の頃、幹事会で議論して、レジュメを 1 週間前に配布してほしいという依頼を発表者をお願い(無理強い)した。きついなあという声もあったが、若干の予習もでき、その後、(何日前かは様々であるが)ほぼ定着したようである。

4. 研究会議の将来

研究会議は、研究室相互の風通しをよくするための組織として、また構成員の相互交流を活性化するための装置として、今後とも維持されるとともに、時代に合った新たな活動を展開してほしい。

21 世紀において生物・環境工学はますます専門性を高めた研究活動が推進されることと思うが、その対象は食料生産をベースとしたフィールド(試験管から地球・宇宙空間まで)であるから、専門性と同時に一般性を持った研究を展開すべき分野と思うからである。

同窓会員より 100 周年によせて

安田講堂と私

村田 定彦 (昭和 23 年卒)

農業土木学界創立 70 周年記念の大会が、昨年 8 月の 2、3、4、5 の 4 日間に亘りおこなわれたその折、理事だった私は表彰を受けた。その通知を受けとり驚いたのは、2 日目の講演会の会場が安田講堂になっていた事で、蓮見重彦総長の祝辞もある。久方の大学もまた楽しからずやと思った。

あの 44 年 1 月の東大紛争の最中、安保条約反対を叫ぶ全学連が立てこもる安田講堂に、機動隊が放水する異様なまでのシーンは脳裏にふかく刻まれていた。

私達 20 年入学生は変則で入学試験はなく、代わりに 4 月 1 日の入学式まえの 3 月 28 日、口答試問と体格検査がおこなわれた。私の当時の日記 (4 月 3 日) には次のように書かれている。『“静かなること林の如かれ”とは入学式における内田祥二総長の学生に対する訓示である。』それは、東京大空襲 (3 月 10 日) 直後の戦乱の真っ只中であり、新入生に誇りを持って冷静にとの辞であった。只残念な事に、その時、混雑のせいか安田講堂に入った記憶が私にはまったくない。その 1 年ぐらい後、安田講堂で巖本マリのバイオリン演奏会が催され、私も聴きにはいったが、そのときも中の様子は思いだせない。卒業式の時は、前年に学生結婚をした妻との新婚旅行を兼ねていたので式には出ずじまいであった。

8 月 3 日の焼けつくやうな暑さの中、赤門、三四郎の池を抜け講堂に入った。三四郎の池はカスケード (CASCADE) はあっても水は濁っていた。講堂の中は、外観の威容とは異なり、広くは無いが落ち着きがあり、採光の良い設計になっていることも始めて知った。円形の外廊下をぐるぐると廻ったが、窓越しに差し込む自然の光は明るく、楽しかった。

更に、驚き見なおしたのは、大学が実に広く、木木の緑の多い事だった。

虚脱と無縁であった私の戦後

長 高連 (昭和 23 年卒)

私は昭和 20 年 4 月東大農業土木学科に入学した。当時旧制高校生によく讀まれたゲーテファウスト終章の干拓讃歌に影響されたのか食糧危機の我が国情にうながされた結果であったかもしれない。第 2 次大戦末期 B29 の空襲で東京の中心は大半焼土となっていた。私も 5 月最後の空襲で焼け出された。静岡の山中のダムの子の社宅の兄のもとに母と共に逃れたが入学して 2 ヶ月足らずだから秋葉先生や新沢先生の御講義を受けたはずだが辛うじて今に覚えているのは大学のキャンパスで受けた福田先生の測量実習であった。山中で茫然としていた私に一葉の葉書が届いた。見れば新潟県で測量実習に参加せよとの事である。

あの混乱期によくぞ届いたものと先生方の御配慮に今も感謝しているが、放心を捨てて私は参加した。白井君や渡辺君と新潟県庁にたどりつくと、その中庭にトラックが一台あって原爆機が来たらこれで逃げると聞かされた。

鎧郷村にある鎧潟の干拓測量のためすぐ鎧郷に行けとの指示があった。着いて見ると昭和天皇の終戦の放送の直後であったにもかゝらず村の人々は虚脱どころではなく私達学生の応援を感謝し干拓の必要を説き今の我が国の食糧危機を克服するのはこの事業だと情熱をこめて激励された。そうだ此の道だ。此の事業だと私の虚脱は一転して前途に明るい光りを見つめることが出来た。その後加治村の 300ha の耕地整理事業や孺恋村の開拓原図作りに参加したが関係した農家の方々や耕地課の技師の人々の事業にかゝる情熱には感銘するばかりであった。その後 23 年 4 月農林省開拓局土地改良課、後に設計課に入ったが敗戦後の食糧難や劣悪な生活条件のなか上司の方々は我が国を救う土地改良事業とその技術の向上に情熱をか

たむけられていた。毎日がそのための熱心な討論であった。その方々の姿は今も忘れられない。私のいささか戦争のために遅くきた青春の日々は使命観でいっぱい充実して働くことが出来た。当時の設計課で机を並べた方々と会うたびにあのころはよかったと話し合うことがよくある。今日の農業土木の発展の基となった先輩方の情熱をこのさいかえりみて将来の発展を期していただきたいものと私は切に願っている。

東大農工偕行

佐野 文彦 (昭和 24 年卒)

昭和 20 年 8 月 1 日陸軍工兵少尉に任官し、15 日に失業した私は 21 年 3 月大学に入学し、24 年 3 月に卒業した。同年から始まった公務員試験に合格したが、同年 GHQ から発令された公職追放令のため公職には就けず、師岡政夫先輩のお世話で農林関係の各地現場で 3 年間、人夫として各種施工機械の運転に従事した。以来、施工機械の運用と開発に生き甲斐を感じてきたが、旧軍の工兵に大きく欠けていたのは施工機械力であったとの認識があり、米国に負けない施工機械化を実現したいという強い思いがその原動力であった。

ところで、表題の「偕行」とは陸軍現役将校の集いである偕行社からとった名称であるが、同窓の陸士関係者を探したところ下記の 18 名がおられる。間違や遺漏があろうと思われるがお許し下さい。58 期が最後の将校で、59 期、60 期は本科在校中で兵科は決まっていた。61 期は士官学校の最後の期で、予科士官学校に在校中であった。

昭和 4 年卒、西村太郎氏(33 期?陸軍歩兵少尉で退官)、6 年卒、庄司英信先生(38 期中退、砲兵)、24 年卒、安達亮造君(58 期、航空)、佐野文彦(58 期、工兵)、25 年卒、有賀亮君(59 期、工兵)、井上成一君(59 期、歩兵)、26 年卒、目木成吉君(59 期、航空)、27 年卒、後藤富士雄君(61 期)、志賀重信君(61 期)中川昭一郎君(61 期)、28 年卒、川上隆君(陸経 10 期)、関弘道君(60 期、航空)、関谷光博君(61 期)、中川稔君(61 期)、中瀬戸正君(61 期)、前田芳郎君(60 期、工兵)、山崎作蔵君(60 期、航空)、29 年卒、西村辰夫君(60 期、航空)。

庄司先生は現在 96 歳でなお矍鑠としておられるが、私は昭和 27 年追放令解除とともに先生の助手として拾って頂いた。

蛇足であるが、工兵が比較的に多いので、作戦要務令より「工兵ノ本領」を記して見る。

「工兵ノ本領ハ作戦ノ全経過ニ互リ、身ヲ挺シテ難局ニ当タリ、其ノ特有ノ技術的能力ヲ發揮シテ、天然ヲ制シ人為ニ克チ、以テ全軍戦捷ノ途ヲ拓クニ在リ。故ニ工兵ハ各種技術ニ精熟スルト共ニ、剛胆ニシテ周密、耐忍ニシテ機敏、全軍ノ犠牲タルベキ気魄ヲ堅持セザルベカラズ。工兵ハ常ニ兵器及材料ヲ尊重愛護シ整備、節用ニ努ムベシ。」

因に、24 年卒同窓 14 名中、陸士 2 名、海兵 5 名である。

100 年の中頃の大学

須藤 清次 (昭和 24 年卒)

私どもは 1946 年 5 月に入学したが、49 年 3 月に卒業できた。3 年未満で卒業という変則は 45 年までつづいた戦争の余波だった。同級生は陸士・海兵の出身や転学者であった。この 3 月は高校(戦時下の修業年限 2 年から 3 年に戻ったので)の卒業生がいなかったのである。軍学校の出身者は卒業後数年間は公職追放令で就職の苦勞をした。

農業土木学は 100 年間発展し次の 21 世紀さらに発展をとということについて、一つの思いが浮かんできた。私どもは最初の 100 年間の中頃に大学生であったが、それまでの 50 年間は遅々たる歩みであった。それ以降は発展というにふさわしい推移であった。そこで、発展は一般に指数的に増えることから、この

学問についてはどう現れるだろうかと、閑な時間つぶしをしてみた。

100 年の中頃までは学の内容は横の時間軸にへばりつくように徐々に増えてきたが、それ以降は指数曲線が立ち上がってきたのだと。しかし既に言われているように、人類の環境には限界がある。追加された生物・環境工学という用語は、発展の容量ではなく、この学をふくめて世の発展の限界を指し示すものではなかろうか。

戦後派の思い出

鈴木 重義 (昭和 26 年卒)

先日、家にたまった物(主に書籍や印刷物)を処理しているとき、たまたま東大に入学した年の田中貞次教授の授業のノートが見つかった。最初の授業のとき、黒板がドイツ語で埋まったことが懐かしく思い出された。秋葉教授の講演原稿やかたみの書籍など捨て難いものも出てきた。土地改良事業の経済効果の算定法など、多岐にわたっている。超多忙な現職のまま亡くなったので、著書の形になっていないのが惜まれる。私は学部卒業後、特別研究生として5年間、現場にお伴してそこから研究テーマを見つけることを学んだ。最初に手がけたのは畑地かんがいの研究で、厚木や相模原に毎日実験に通ったことが思い出される。私が入学した1948年は、大学の名称から「帝国」の文字が消えた年であり、何でも民主化ということで、単位の評価も合・非だけというのは、開学以来だったのではないか。同級生も私と同じ陸・海軍の学校卒が多く、ユニークな仲間が揃っていた。学科名も農業土木から農業工学に変わり、これから何かが始まるという予感に満ちていた。物のない時代、授業に遅れて下駄を手にとってそっと入った記憶が懐かしい。

終戦前後のドサクサ

田島 幸市 (昭和 26 年卒)

終戦直前の旧制高校の入試に、敵性語という事で、私の苦手とする英語は無かったのですが、大学入試の時には、英語の試験がありました。しかし、無事、入学したのです。

当時、大学のある本郷へは、片道二時間かけて通学していました。しかし、せっかく来たのに、掲示板には「休講」の文字。また二時間かけて帰るという状態が何度か続き、嫌気がさしてました。私が、鮎釣りをしたりして、時間を持て余していた時、町の中学校校長から「理数科の授業を手伝ってくれ。」という話が持ち上がり、先生の仕事を引き受けました。しかし、その年の秋頃、二五年卒の井上兄から「大学だけは卒業しておけ。」と言われ、先づ、授業料を納め大学に戻りました。授業料だけは納めておいたので、一年遅れても私は、二年相当学年なのです。

私は、二三年・二四年入学の人達と一緒に授業を受けたり、また、単位を取るための試験も受けて、学校生活は、忙しいものとなりました。一年経つと、三年相当学年です。

二三年入学の人達が、公務員試験上級職を受けると聞き、私も受験してみました。きっと、秋葉教授が、私を卒業させざるを得なかったのは、その受験結果が合格だったからでしょうか。実質二年で卒業出来たのも、また、単位取得が合格・不合格で表示されたために、誰がトップで、誰が逆トップであるかが判らなかつた事は、今、思えばみな「戦後のドサクサ」だったと思います。

卒業から、いつの間にやら半世紀。残された人生を有意義に過したいと思います。

大学受験の思い出

塚原 眞市 (昭和 27 年卒)

「君はどうしてこの学科を受験したのだね」しばらくして「私は印旛沼の干拓を是非やりたいと思いましてこの学科を受験しました。或本で幕末に近い天保の頃時の老中水野越前守忠邦が天保の飢饉に鑑み新田開発の為印旛沼の掘割工事を数藩に請負せたが土質が悪いため遂に成功しなかったという話を読んだ事がありましたので」と答えましたら「君、印旛沼の干拓は今農林省で実施しているよ。君の本心は東京で大学生活を送りたいのだろう」と。しまった、本心を見透かされたか。これは今から 50 年程前昭和 24 年 3 月私が農業工学科を受験した時の二次試験の口頭試問の時の情景です。質問者の方は故秋葉教授であったと思います。辛うじて入学を許可され念願通り東京で楽しい大学生活を送ることが出来ました。

戦後昭和 20~30 年代は食糧増産が国政のバックボーンで干拓事業は平和な国土造成であり又民心安定にも一役買っていたので事業は大いに進められた時代でした。

最近「中海干拓事業の本庄工区」に中止の断が下った様ですが此の事業に関係された幾多の先輩後輩の方々の思いはどんなでしょう。私が農業土木を志した 50 年前と今は時代の流れは激変し国家国民のニーズも時代と共に変わって来ていますが何か戸惑いを感じる今日この頃です。

思うことその位を出でず

浅原 辰夫 (昭和 27 年卒)

社会に出てから既に半世紀の歳月を閲した。この間、ひたすらに農業土木の世界に身をおいてきたが、今は閑職にあって、世の中を些か斜めに眺めている。

このところ巷間、公共事業のあり方についての議論が喧しい。農業土木も変革の時にあることは間違いない。だが「後生畏るべし」で後進は健全だし心配はない。年寄は分相応の考えを嗜みとすべきだと思うのだが、これがなかなか難しい。

この夏、ふとした縁があって、カムチャツカを訪れた。州の広さは日本の総面積を超えるというのに人口は僅かに 70 万人。残雪を戴く秀麗な火山の麓には、果てしなき未開の原野が広がっている。まず脳裏を掠めたのは、この大地の農業開発だった。膨大な未利用地を生産緑地に改造する。そこには男のロマンがあり、農業土木の出番がある。

一週間の涼しい旅から戻った東京は記録的な猛暑だった。カムチャツカでのあの想いは「邯鄲の夢」だったのか。やはり「思うことその位を出でず」が無難なのかと、改めてその意味を噛みしめているところである。

私の大学時代

中村 忠春 (昭和 27 年卒)

昭和 20 年の敗戦後、一連の民主化政策はとられたが、インフレと食料不足はストライキや米寄せ運動を高揚し頻発させた。従って米政府はインフレ終息と経済自立を図り、入学直前の 24 年 3 月よりいわゆるドッジラインを指示してきた。25 年 6 月には朝鮮戦争が勃発。卒業前の 26 年秋には平和・安保両条約、卒業直後の 27 年 4 月には行政協定も結ばれ、いわゆる 50 年体制日本が始まった。大学も、23 年農機・塩田両講座が増え、農業土木学科は農業工学科に改称。24 年駒場の一高は教養学部となり新制が発足した。

当時の学生：旧制農工卒は 26~28 年の 3 期だが、各期の平均年齢は逆に 28~26 年卒の順だそうだ。私の 27 年卒も現役入学皆無、4~1 年浪人だけだ。こんな混乱は 20 年代卒業生共通のものだった。反面、男女共学となり農学部にも 24 年入学に 1 名いて、女王様の処遇を受けていた。当時銀杏バッジができたが

評判悪く、ある学部の講義中、破れ傘で区別するとは東大も末だと言われたとか。

世相の記憶： 神田駅前や新宿西口などは闇市がそのまま、兵隊靴と引換えに雑炊を食べたり密醸焼酎を飲んだりした。インフレ収斂と朝鮮戦争特需とは、逆に射幸風潮をあおってパチンコが大流行、本郷の書店街は軒並みパチンコ屋に変わったりした。

農工二八会

高田 徳博 (昭和 28 年卒)

農業土木講座の開設 100 周年を心からお慶び申し上げます。この機会に年次幹事として、28 年卒の現況について報告させていただきます。

私どもは入学以来今年が 50 年目になりますので、100 年の歴史の丁度中程に在学したことになります。戦後の学制改革で、旧制最後の卒業生となりましたが、当時はまだ戦後の混乱期で、クラスの中には軍歴や職歴のある人もおり、年齢的にも差が大きく、大正末期から昭和にかけての生まれですので現在では古稀を越えていて、大半の者が第 2 の人生も終えて自適の日々に入っております。

昭和 25 年の入学時には 28 名でしたが、現在は 20 名となりました。年を重ねる毎に昔日が懐しく、不定期であったクラス会も数年前からは毎年暮に忘年会を兼ねて集まっております。平成 5 年の卒業後 40 周年記念の会では、夫人同伴で成田山に詣で、特別に護摩を焚いて頂き健康と家内安全を祈願しました。この御利益かどうか、10 年程前に創った敬弔基金からの支出がその後はゼロで続いております。クラス会では毎回 7 割程度出席率で、お互いの健康に感謝し楽しいひと時を持っております。

両刃の剣

須恵 務 (昭和 28 年卒)

役所を辞めて、準大手のゼネコンに入社(在職 12 年半)したのは、日本経済が平成景気を迎えた、昭和 61 年である。会社の業績は、かなりの勢いで伸び始めていた。業績伸長のバネにしたのは、民間の大規模開発(市街地再開発、リゾート開発など)の計画立案への参入である。社内に蓄積された開発のノウハウを民間の事業主体に売り込み、将来のハードの受注競争を有利に展開しようとする手法である。この手法の中に、開発予定地内で地主になることが含まれていた。事業主体への売り込み、受注競争の何れにも有効と考えたからである。

この順風満帆の社業が、やがて下降線をたどる。バブルが弾けて景気が失速すると、民間の開発投資にブレーキが掛かり、会社の売り上げはジリ貧に。取得した土地が値下がりして経営を圧迫する。平成景気の中で、業績アップに貢献した不動産は、一転して、不況克服に懸命なリストラを進める会社の足枷に変わった。バブルが不動産を「両刃の剣」にしたのである。リスク・ヘッジの難しさを、思い知ることになった。

何故農業土木技術者となったか

中川 稔 (昭和 28 年卒)

私は旧制第五高等学校理科を 1945 年に卒業し、本学の農業工学科を 1948 年に卒業しました。当時の学制では旧制高校を卒業すると大学の学科を選ぶときに専門が決まります。何故農学土木を選んだかを述べます。

私の父は国鉄の土木技術者で最後は土木学会の書記長をして現在の四谷の学会本部を設定した責任者で

した。父は私を土木工学に関係がある専門家にしたいと思っておりました。父の本箱には土木関係の本がたくさんありその中に土木学会編の明治以前土木史があり、それを興味をもって読んでみるとその90%は農学土木の事業でした。やはり日本は農業国だということが判りました。

いよいよ受験ということで熊本から東京に帰省する汽車で偶然農業団体の役員の方と一緒にになりました。私が今から東大の農学部を受験すると聞くと現在は国民の食料増産が農林省の最大の課題でそのために農業土木の技術者が一番活躍していると、是非農業土木を勉強しなさいとアドバイスをして呉れました。

帰宅してすぐ父にこのことを云いました。父は当時土木学会で刊行した、水理公式集、コンクリート標準仕様書を農林省農地局の設計課で全国の希望者をまとめて購入していて、大変真面目に勉強しているグループだから、お前も受験してよいと賛成して呉れたので、2.5倍の競争試験に挑戦し無事合格し、主任教授の秋葉先生の面接を受けた。先生は「君はお父さんの仕事の関係で農業土木のことは大体知っているでしょうが、お百姓のためにしっかり勉強して下さい。」と述べられた。27年に公務員試験に合格し、国税庁財務局などからも求人があったが農林省一本で受験し、幸いにも農地局設計課に採用された。30年間の農林省の生活のうち、大部分を計画部で過ごし、愛知用水公団に出向し、牧尾ダムの設計に関係し、1964～1968年迄の4年間外務省に出向し、カンボジア大使館に出向し、経済技術協力、貿易、農業と多面的な任事に関係した。私のもっとも青春を謳歌した時代であった。また、農村の総合整備、圃場整備、集落排水、など農村開発の最盛期で大変夢多き技術者生活を送ることが出来た。

今後の展望については地球規模の環境保全のためには世界でもっとも進歩した農業土木技術を活用して、地球の緑の保全拡大に資するためには、政界、国際機関、農水省だけでなく他省庁、教育機関、研究機関、民間会社、とくにコンサルタント、に積極的に進出して優秀な学生が集い、自由に多角的な方向に夢を伸ばすことが農業土木の伝統であると思います。戦後の農業土木の歴史を振り返ると農村が必要とする事業を組み立ててきた、グループであると信じます。

祖父の顕彰碑

村田 稔尚 (昭和 31 年卒)

山口県防府市の、私の実家のある集落の会館前に、30年前、私の祖父の名を冠した「村田光尾翁顕彰碑」が建てられ、今も鎮座している。さて、これをさらに遡る46年前、私が農業工学科に進学した春に帰郷した折、子どもときから世話になっていた篤農家の主人に、私の専攻を問われた。「農業土木だよ。」と答えると、「それでは、卒業すると耕地課の仕事をするのですね。それはいい。」ととても喜んでくれた。この二つの話は一つの共通項をもつ。昭和の初期に、集落の上流部深谷に貯水池が築造され、以来、集落とその周辺は、それまで度々悩まされてきた干ばつ被害を解消することができたということである。この灌漑事業のために、耕地整理組合をつくり組合長として献身したのが祖父で、また、これに補助金を出し、技師を派遣し設計と施工監督に当たさせたのが県耕地課であった。集落の人々は、この灌漑事業を高く評価し、その結果、祖父の顕彰碑を建て、耕地課に信頼と親しみをもったわけである。時代が移り、学科の名も変わったが、農業土木を母胎とする実学の分野が今後どれだけ社会のニーズに応える仕事ができるか考えさせられる。

私と農業土木

山田 稔美 (昭和 31 年卒)

「諸君は今進学を決める時期で悩んでいると思うが、農学部には農業工学という学科がある。この学科はあまり知られていないが、就職率が極めて高く、今の日本に最も重要な食糧増産に必要な不可欠な学問を研究している学科だ。ただ人気が高いだけで進学を選ぶのではなく、このような学科に着目することも大切

なことだと思う。」

教養学部の2年の進学希望を提出する時期に、生物学の講義の後で、沼野井教授がこのような提言をされた。入学前から先生の「生物の研究」を受験参考書として利用し、沼野井ファンであった私が農業土木に関心を持った最初であり、単純に高就職率に釣られて、農業工学科を選択した。

それ以来、私と農業土木の関係はほぼ半世紀に亘り、前半は国内で、後半は開発途上国で従事した。農業は大きく分けて、生産、流通、農民生活の3部門から成り立つと思うが、農業土木はこの何れにも必要で深く係わっている。国内では、農業土木はあまりにもその成果が目覚ましくて急速にその役割を果たし終え、また最近では公共工事の風当たりが強いために活動範囲が狭くなっているが、農業が経済を支える開発途上国では絶対必要で、かつ要請の高い部門である。しかし、高事業費、非速効性、特定された受益者（これには異論がある）、維持管理体制の未確立等の理由から外務省、大使館が消極的であり、この解決が今後の課題と思われる。地球規模で見れば、食糧事情、農村の貧困、砂漠化防止、水源確保による二期作の安定化、洪水防御及び湿地帯の改良等農業土木への期待は大きく、海外では農業土木技術者の地位は高い。このような仕事に従事するきっかけを与えていただいた沼野井教授に感謝している。

一卒業生の片思い

壽田 妙観 (昭和 32 年卒)

卒業後いささか考えるところあって数ある選択肢の中から当時設立後間もない農林漁業金融公庫に就職した私は、その後の国際協力事業団での投融資事業や退職後の世界銀行での調査事業等を通じて我が国の“農業土木事業”の有り様を側面から見まもる立場にあった。

そこで一卒業生としての感想を率直に申し述べるならば、日本の農政が大転換を迫られた1970年前後から今日に至るまでの約30年間、農業土木事業に直接携わられた人々のご苦勞は並大抵なものではなかったであろうと推察する。

この時期、我が国の経済社会構造が急激な変貌を遂げ人々の価値観が多様化する中で、農業土木事業が農業・農村のニーズを的確に捉え、人々の理解と合意を取りつけつつ、その社会的要請に応えるための努力をどこまで果してきたか、残念ながら部外者には十分な理解が得られずに終わった面が多々あったように思われるからだ。

その原因が単にアカウントビリティの欠如によるものであるならば救いもあるが、部外者の目が農業土木事業の在り方そのものを問うているとすれば、問題は極めて深刻と言わねばならない。人間、逆境に陥るとややもすれば自己防衛的な姿勢を強めがちになるものだが、過去の栄光を追い続けることなく新しい時代の社会的経済的要請に真摯に応えることによって、はじめて21世紀の農業土木事業の活路を見出すことが可能となる。この際、組織を挙げて本学科の抜本的な意識改革と体質改善に取り組む必要があると考える。

お叱りを覚悟の上で敢えて苦言を呈する次第である。

来し方行く末を思う

仲野 良紀 (昭和 32 年卒)

私が農業工学科に進学した昭和30年(1955年)初頭は、我が国も戦後の荒廃から漸く立ち直り、GNP10%強の岩戸景気と呼ばれた高度成長期に入り始めていたが、戦中・戦後の食糧難に苦しんだ国にとって食糧増産は依然として最重要政策の一つであり、昭和32年には愛知用水、八郎潟干拓が着工され、大規模土地改良事業が農林省農地局(後の農水省構造改善局)主導の下に全国で行われつつあった。当時この種の事業の計画・設計・施工管理は官庁の技術者によって行われていたから、公務員の採用数は多く、大学の農

業工学科系講座の新・増設に伴う助手の採用もあり、急成長中のゼネコンの採用増もあって、就職に困るようなことは無かった。思えば幸福な時代であった。

しかし戦後の混乱期から土地改良の諸制度を整え、国家プロジェクトとして立ち上げるまでの諸先輩の苦労は並大抵のものではなかったものと思われる。この頃の土地改良技術とそれを支える基礎的研究の中心的存在だった農業工学科の秋葉教授は私の三年次在学中に60歳の定年を待たずに亡くなられたが、戦後の困難な時期の過労が死期を早めたのではなかろうか。先生の遺稿を集めた「秋葉満寿次博士選集」は今読み返しても教えられることが多く、その卓見と先見の明に感銘を受ける。先生は農業土木の総合性を強調されており、先生自身も、研究においてそれを身をもって実践された。しかしながら、その後40年間の農業・農村をめぐる諸問題は、グローバル化、過疎化、環境問題なども絡み、ますます複雑・多様化し、一方、科学・技術の急速な進歩は否応なしに専門化・細分化を迫っている。研究論文も英文の国際誌に掲載されなければ高い評価が得られないようになってきた。多くの分野の、高度のスペシャリストの組織的協力によってしかこの分野の学と技術の進歩と総合化を図ることができない時代に入ってきたように思われる。

大学もこの新たな事態に対応するため、学科名を変更し、水質・環境問題や農村計画なども取り入れ、カリキュラムを多様化してきた。しかし、未知の問題に鋭く、深く切り込んで行くための主要な理論的武器（基礎学）を何にするのか不明確なまま無定見に守備範囲を拡大し、その結果として、専門家としての基礎的トレーニングを十分行えないまま卒業生を社会に送り出せば、社会的信頼を失う事になるであろう。日本技術者教育認定機構(JABEE)の発足は、学の性格を曖昧のまま進むことを許さないのではなかろうか。この機会に、次の100年の発展の方向を示す学問的合理性のある将来構想が出されることを期待したい。

百年の栄光と斜陽

林 尚孝 (昭和32年卒)

私ども十六名が農業工学科を卒業してから四十三年が経つ。農業工学科百年の歴史の半分近くを経験したことになる。振り返ってみると、その前半は誇りと栄光に満ちたものであったが、最近斜陽を感じる人が多い。

日本が敗戦から奇跡の復興を遂げた真の裏方は、農業土木と農業機械にあったと思う。わが国独自の田植機や自脱コンバインの発明により、十アール当たり二百時間を要していた水稲栽培は、今やその五分の一以下となった。その陰にはわが農業土木による水田基盤整備があった。この結果工業のめざましい発展がもたらされ、日本は国際的な地位を回復した。農村から重労働を追放し省力化を実現したものの、農村の過疎化や農業の相対的地位低下は農民に絶望感を与える結果となった。

この十数年、盗作教授に始まり、諫早干拓の事例、農業構造改善局の汚職、参議院議員選挙枠など肩身の狭い話題に事欠かない。

今後ふたたび農業工学の栄光を見ることが出来るのであろうか。

農業土木学会誌小特集に感謝

江崎 要 (昭和33年卒)

昭和33年卒業の私は、ありがたいことですが定年の遅い私大勤務のため、大学教員仲間の現役では最も年寄りの部類になってきたようです。明治大学の農業土木系の授業科目に「土地改良法規」があります。非常勤講師として小出進氏（S30年卒、母校の元東京大学教授）に講義をお願いしてきましたが、年齢制限によってこれが不可能になり、本年度急きょ高令者（65才以上をこう称するらしい）の仲間入りをした江崎が担当することになりました。土地改良法規の授業、3～4回分ならそう困難性は感じませんが、

規定通りの15週分、2単位を与えたとすると話は別です。講義資料として全国土地改良事業団体連合会発行の「土地改良法解説」など数点を探し出しました。とくにこの全土連の書籍は詳細な逐条解説つきで大変な良書なのですが、この種の条文解説だけで15週分の講義が構成できるとは考えられません。

このように大変悩んでいる時に、農業土木学会誌が威力を発揮しました。丁度農業土木学会でも百周年記念関連の小特集を組んでおり、1999年8月号の耕地整理法制定100年、2000年1月号の農政改革とこれからの農業農村整備、などを精読できました。前者からは大橋欣治氏(539年卒)の報文を、後者からは平野達男氏(552年卒)の報文を、この講義の中に組み込ませていただきました。100年に及ぶ土地改良法関連の沿革と農業土木事業との関連や、いわゆる新農業基本法と今後の事業展開の方向性などが感じとれます。厚くお礼申し上げる次第です。両氏の執筆内容と同時に、学会専務理事を長く務めた白石英彦氏(533年卒)の手腕など、本学科同窓生諸氏の優秀性を強く感じております。

1999年4月号では、学の系譜と変遷が小特集として組まれており、星野達夫(現母校講師)・佐藤洋平(現母校教授)両氏の共同執筆により、東京大学の農業工学科関連の100年の沿革・歴史が分かり易くまとめられております。是非ご一読されるようお勧め致します。(明治大学農学部)

礼節を失った日本人

柴崎 光弘 (昭和33年卒)

この年になると、やたら同窓会が多くなっているのに気づく。国民学校、中学、高校、大学、そして同好会等々目白押しだ。まるで残された時間が少ないから急げと言わんばかりである。小生の農工のクラスは丁度昭和の一桁と二桁の境目の世代であるためか、集う度に楽しさ、懐しさを満喫できるのは云うに及ばず、古き良き時代の構築に一役買った充実感に悔いなき人生の想いを重ね合わせていた。

だが、何処か日本はおかしいぞと感じられる事に最近出くわした。好きなオペラをたて続けに海外と日本で観劇した際の出来事である。休日のウィーンでの「フィデリオ」は素晴らしく、当然の事ながらカーテンコールは延々と十回にも及んだ。その間観客は自分を感動の極致へと連行した相手に心から敬意と感謝の意を籠め、万来の拍手の中、誰一人として席を立つ者はなかった。旬日を経ずして帰国後これも決して退け取らない出来映えの「トスカ」では、ブラボーの掛け声こそあったが、のっけから退出する観客は後を絶たず、これが礼儀を弁えていると評判の高かった戦前の文化的日本人の本当の子孫なのかと口惜しく、恥ずかしく思うと同時に、こんな事で外国に伍する日本の将来はあるのだろうかと憂鬱になっているこの頃である。(ケミカルグラウト 社長)

群盲が撫でた中国西部の農業水利事情

白石 英彦 (昭和33年卒)

この8月から日本農業土木総合研究所にお世話になることになったが、急遽8月28日から10日間、中国との技術交流の調査団に参加することになった。

中国では、昨年「西部大開発」の方針が打ち出され、農業水利技術についても西部地域(乾燥地域)に適する、すなわち水資源の乏しい地域の節水灌漑技術に関する研究開発が進められている。これを受けて今回の技術交流テーマは「中国西部開発と農業水利技術の発展方向」となっている。

現地調査を行ったのは主として次の2地区である。(a)内蒙古自治区のフフホト近辺の面積50万haの河套灌区 (b) 甘粛省蘭州近辺の6万haの景泰川灌区。

いずれの地区も年降雨量200mm程度、蒸発量は一桁上の乾燥地域である。駆け足の現地調査で、群盲象を撫でるくらいではあるが、次のような感想を強く感じた。

(1) 大国中国の積極的な動きは注目に値する。農業開発の見直しに拍車をかけたのは、レスターブラウン

が指摘した「中国の食糧事情」のようである。

- (2) 砂漠化防止対策は着実に進んでいる。150ha 程度の試験区では水源を井戸に求め、太陽電池により揚水しスプリンクラー、ドリップなどの節水灌漑により果樹、ヒマワリ、トウモロコシなどを育成しており、(b) 地区も灌漑事業を行う以前の 10 年余り前は不毛の砂漠地帯であった。
- (3) 節水をより促進するため (b) 地区では 1 年ほど前より水価を従量制にし、三角堰などで農民自身が計量している。市場経済の色彩の濃い制度が体制の異なる中国で始められているのに注目した。
- (4) 水利施設系にバッファ及び中間貯留の考え方が希薄のようである。(a) (b) 地区とも現在は水源における供給主導型であるが、従量制が進めば需要主導型となり二つの異なる方式のマッチングにはバッファがどうしても必要になる。

短い期間であったが乾杯、乾杯の連続の熱烈歓迎を受け隣国中国に親しみを深めた 10 日間であった。

農村と向き合って 43 年

藤川 正巳 (昭和 33 年卒)

卒業の頃は、21 世紀を迎えられるかどうかは五分五分だと思っていた。その新世紀も、もう間近となった。途中重大な病気を患って、たぶん近代医学の進歩に救われたと思えるから、予想は当たっていたと言えるだろう。腰掛けのつもりで入った石川県庁に 34 年、続いて土地連で 9 年目、ほぼ地方の農業土木行政にどっぷり浸かってきた。経歴としては、わが同窓では稀少の部類に入る。

そろそろ最後のご奉公にさしかかっている今、改めて来し方を振り返るといささか感無量である。自家用車を運転してゴルフ場に出かけることなど、学生時代考えても見なかった。何しろ食料の配給制が半分残っていたような時代である。

43 年間付き合い続けてきた農村も、一部を除いては都市並に豊かになった。農業土木の役割は大きかったと思う。だが、経済発展の歪みが最も現れているのは、むしろ農村ではないだろうか。21 世紀は「地方の時代」だとよく言われる。そうなるためには、農村文化を背景にした地域づくり必須条件だ。地方に最も欠けるものは人材である。人材の供給と、これを育成できる環境づくりに大学も力を貸して貰いたい。

農業機械化と畏友

木谷 収 (昭和 34 年卒)

われわれ昭和 34 年卒業組が本郷から進学した時は、戦後の混乱期、食料危機を乗り越えて、その数年前に公布された農業機械化促進法を契機に、日本農業の機械化が飛躍はじめた時であった。33 年の 5 月祭で何を学科としてやろうかと言うことになり、「日本農業の機械化」という大それた展示をすることとなった。当時はあまりみる機会がなかった大型農業機械をお借りして展示したり、ガリ版刷りのパンフレット「日本農業の機械化」を作って配ったりした。女子学生は寄ってこなかったが、子供が興味を示してくれたのを覚えている。

農業機械化で、いつも胸痛むのは、同期の小泉武紀君のことである。私は同君の亡くなる 1 月ほど前に彼が研究室長をしていた東北農試を訪れた。びっくりしたのは、彼の目の周りが黒い隈で覆われていることだった。彼はその少し前に看病していたお母さんを亡くされ、しかも農業機械の研究テーマを 7 つも抱えて、憔悴しきっていた。聞くと「今でも母が入院していた病院の方に知らず知らず足が向くんだ」とのこと、私は、「とにかく少し休めよ」といって分かれた。一月も経たぬある日、突然電話で小泉君が試験場でくも膜下出血で倒れたとの知らせがあり、追って亡くなったのと連絡を受けて盛岡へ急いだ。彼は倒れる直前まで試験場で農業機械化の研究をしていたと聞かされ、胸が塞がる想いであった。ほぼ四半世紀前のことである。この間農業機械は高度に発達したが、農業工学 100 年の歴史の中には、小泉君のような献身の例が多くあるのではなからうか。尊敬の念をこめてご冥福をお祈りする。

農業工学科への進学

中島 均 (昭和 34 年卒)

私は「百年の歩み」のほぼ中間の 1957 年（昭和 32 年）に農業工学科へ進学しました。駒場寮では運動部に所属しており、授業に出ることも少なく成績は最低に近い状態でした。当時は戦後の食料危機は幾分緩和されていましたが、外食券が無いと食事もできない状況で、食糧増産が国の最重要課題とされ、大規模な農地開拓、干拓のプロジェクトが紙上を賑わしており、こんな仕事をやりたいと思っていました。新沢先生の巧みなオリエンテーションと成績を考慮して農業工学科への進学を決めました。私達のクラスは定員 20 名に近い 19 名が進学し、大半の級友は第一志望で進学してきました。歓迎会の席上、先生から第一志望の学生がこんなに多いのは初めてと言われたことを覚えています。

駒場寮から追分寮へ移り、寮に籠もることも出来ず大学へは真面目に通った積りです。田無の農場実習には、囚人護送車のようなバスで行ったことや、研修旅行では先輩に飲ませて貰ったなどの思い出があります。

農林省に就職した級友が多く、また有能な幹事がおり卒業後もクラス会を頻繁に開いてきました。昨年は卒業 40 周年記念に夫人同伴でヨーロッパ旅行もしました。

農業工学科への進学は良い仲間恵まれ幸運な選択でした。また仕事の面でも農民から感謝され、遣り甲斐あるしごとでした。現在の後輩は大変な激動期におりご苦労されていますが、農業は生命の素であり、生物・環境工学と改称されたのを契機に新たな発展の路を開くよう期待しています。

農業工学から経済企画庁へ

吉村 彰 (昭和 34 年卒)

農業工学科を卒業し、大学時代に修得した「ことがら」を農林省で活かして仕事をしていたのに、何故経済企画庁に移籍したのか。今迄数多くの方からいただいた質問である。卒業満 10 年の 1969 年 4 月、新全国総合開発計画の仕上げに入った経済企画庁総合開発局に出向を命ぜられ、新全総の具体化と国土総合開発事業調整費（調査の部）の担当責任者となった。出向して 2 年半が近づいた頃、経済企画庁のある幹部から、突然「経済企画庁に移る気はないか」といわれた。直後、建設省河川局が本籍の課長の話では「農林省へ戻る先のことで、経済企画庁での苦労や業績を全く考慮しない、極めて不快な人事だと、経企庁（プロパー）のお偉方が怒っているようだよ。」とのことで、本人への内示の前に待たされたがかけられ、経企庁がひきとる（移籍させる）方向で進められた。

当時の上司、下河辺淳総合開発局長（後の国土事務次官）と 1 時間以上にわたって懇談した（といっても面接試験だったのでは、と後で考えた）が、建設省から移籍した同局長は、「これからの地域開発行政、経済政策行政には、生物、つまり環境問題も視野に入れられる農業土木出身者が必要」といわれ、それなら思い切って経企庁に移って仕事をしてみようという気になったのである。

下河辺氏は、対日講和条約で当時唯一賠償金を求めていたオランダに、八郎潟干拓への技術協力を依頼することによって解決できると、吉田総理に、建設省の係長時代に進言した農業工学に理解のある行政官であった。

移籍後、国土庁創設のため、田中角栄首相のお声がかりのタスク・フォースに経企庁の代表として加わったり、消費者行政の課長や国民生活白書編集責任者など合計 3 度経企庁と国土庁との間を往復し、退官後 2 つの財団法人に勤めているが、どの場合も、元農業土木技術者というエコノミストの埒外の、普通の「市民感覚」をもった「経企庁在籍者」であり「出身者」でありたいと念じている。

雑 感

坊野 昭夫 (昭和 41 年卒)

郷里の福岡で生活するようになって、5 年が過ぎた。この間、職場も全国業者（いわゆるゼネコン）を辞めて地方業者へ転じることにした。以前と比べると、時間の流れ方が随分ゆったりと感じられるようになった。そのためかどうかわからないが、薄くなりつつあった髪も現状で踏ん張ったまま、高校の同窓会での若返りの評価も高い。このような精神の在り様は、必ずや趣味の面でも良い結果を生みそうなものだが、35 年に及ぶ囲碁との付き合いでは、その成果はさっぱりである。実力三段、営業四段の状況は、時計が止まったまま変化なし。思えば長い囲碁人生で、かなり無駄な時間を費やしてきたような気もするが。

昨年、30 年ぶりくらいであろうか、駒場を訪ねてみた。駅からのアプローチや校舎のレイアウトでは勝手にわからず、少なからずまごついたが、一部残っている駒場寮は昔のまま懐かしかった。一方、キャンパスを歩く学生諸君の服装や、ふと聞こえてくる話題に、隔世の感を新たに、長年駒場に対して持ち続けていた心象風景が大いに修正された日となった。

グローバル・スタンダードについて思うこと

渡辺 光章 (昭和 43 年卒)

欧米先進諸国の基準であり「市場原理」に代表されるグローバル・スタンダードが我が国を始め各国の社会・経済構造をも変える勢いで世界的に広がり始めているようです。ものの本によれば、アングロサクソンの弱肉強食ともいえる「市場原理」が今まで正常に働いてきたとすれば、それはキリスト教という宗教観みたいのものが市場原理の背後に控えて、歯止めの機能を果たしてきたからとのことである。市場原理のもとで「多くを稼げ」、「多くを蓄えよ」とお金儲けに邁進してきたが、大事なことは、稼ぎ蓄えた後に続く「多く施せ」ということで、これらが三位一体となって機能することによって、弱肉強食という猛獣の世界に転落せずに踏み止まることができたということである。

東京大学の総合図書館は大正 12 年の関東大震災の後、米国のロックフェラー財閥の寄付、即ち「施し」によって新たに復旧されて、今日まで多くの優秀な人材を世に送り出すことに貢献してきたことでもあり、これから 21 世紀に向けてグローバル・スタンダードが進展する中で何が大事かと言えば、我々日本人の多くは真の宗教に疎いだけに、それは「愛」に根ざした「施し」ということがキーワードになるのかなと思ったりするのです。

雑 感

早川 征人 (昭和 43 年卒)

卒業以来ほぼ 3 分の 1 世紀を経て、21 世紀を迎えようとしている。我々同期は 50 代も中頃となり、昔なら仕事をリタイアして悠々自適の生活に入るところであるが、現実はとてもそうはいかない。世の中は不況の底を脱し、景気は回復基調にあると言われているが、私の属している建設業界はまだまだ厳しい状況が続いている。公共事業はもういらぬ等の一面的な見方の議論が優勢な中では、業界も我々の頭も思いきった整理統合が必要である。

さて、世の中は IT 革命が進行中であり、私も固まりかけた脳に無理をさせて、時代に遅れぬ努力をしているが、IT の裾野のほんの一部でさまよっているに過ぎない。この十数年のコンピューターの進歩はめざましく、半分遊びで触っていても、そのことは実感できる。まさに日進月歩であり、社会の急激な変貌もむべなるかなである。

いま思えば、我々が学生のころはもっと時がゆっくりと過ぎて行ったように感じるが、こんなことを考えるのも年をとった証拠であろう。あまり真面目な学生ではなかったが、ほろ苦く懐かしく思い出す今日このごろである。

Research Activities

Kamaruddin Abdullah

(Entered into the Graduate School, 1970)

In the past 23 years research activities, after graduating from the Univ. of Tokyo in 1976, have been focused on:

- a. Measurement of basic engineering properties of tropical agricultural products including the measurement of Me , k , Dv , ΔH_{fg} , Pressure drop across deep bed of granular materials, α , C_p , h , Nu , etc.).
- b. Development of mathematical modeling, simulation and optimization of thermal processes such as drying, cooling, freeze drying, etc.
- c. Development of prototypes and laboratory testing of dryers and cooling machines, using renewable energy (solar and biomass) as energy sources.
- d. Modeling and simulation of energy flows in food production.
- e. Energy auditing of agro-based industries.
- f. Action research on the establishment of Small Agro-processing Unit utilizing environmentally friendly renewable energy

Most of these research activities had been conducted either individually, as joint works with fellow Indonesian researchers as well as with Japanese researchers under the JICA-DGHE-IPB Project and JSPS-DGHE-IPB scientific exchange programs. During the implementation of these researches, undergraduate and graduate students have been involved both from inside and outside of IPB as well from overseas (Japanese, German). In conducting these researches supportive grants had been received from the Indonesian Ministry of Education, Japan (JICA, JSPS, ODA grassroots, ASEAN University Consortium).

Current research activity are now focused on field application of accumulated research results to promote the application of renewable energy in the rural area by establishing Small Agro-processing Unit. Five units are now already installed; one unit in Punten Village, East Java for the drying and storage of vegetables, two units in Bali Island (one in Banyuwatis village for the drying on coffee beans, and cloves), and two units in Sumbawa Island (one unit for fish and sea weeds drying in Labu Ijuk village, one unit for drying and milling of coffee in Batu Dulang village). These projects, beside involving cooperatives and local entrepreneurs, also is supported by local university staff such as from Barwijaya University in Malang, East Java, and Udayana University in Bali.

(Head, Laboratory of Energy and Agricultural Electrification, Department of Agricultural Engineering, Bogor Agricultural University-IPB (Indonesia))

深山ダム建設を振り出しに

太田 光彦 (昭和 46 年卒)

昭和 46 年の卒業ですから、早 30 年ほど経過したことになります。農業水利研究室を出て大成建設(株)に入社し、今日まで建設工事一筋に過ごしてきました。丁度、日本が高度成長により世界の主要国に躍りだした時で、インフラの整備・充実が急がれ、最も建設工事が沸いた時節に当たります。農業土木技術者としては、一番幸福な時期を過ごすことができたと言えるでしょう。

会社に入り、最初の配属先が深山ダムでした。かの東大紛争が終わったばかりの年ですので、ずれ込んで入社は 7 月 1 日になり、深山ダムにはその翌日に向かいました。このダムは、栃木県北部的那須野が原開拓建設事業の一環で域内に農業用水を供給する主要なダムです。また、東北新幹線が無い時代、東北本線に揺られながら、新天地への興奮と見知らぬ土地へ向かう心細さとが相半ばする心地だったことを覚えています。

深山ダムは、アスファルト表面しゃ水壁型ロックフィルダムであり、堤高が 75.5m と、このタイプのダムでは世界最高でした。そのためもあってか、工事には錚々たる先輩方が携わっておられました。農水省の事業所には村田定彦さん(昭和 23 年卒)、谷山重孝さん(昭和 34 年卒)、当社には、高木宏さん(昭和 23 年卒)、加藤重男さん(昭和 37 年卒)、大和田幸彦さん(昭和 40 年卒)、早川征人さん(昭和 43 年卒)です。一騎当千のつわもの揃いで、新入社員にとっては雲の上の存在でした。ダムは、今から振りかえってみても技術的になかなか難しく、建設には大変困難なことが多かったと思います。

当時のダム工事では、欧米からの輸入による機械化施工が積極的に推進されていましたが、それでも最大の建設資源は人の力でした。機械も資材も高いときで容易には手に入らず贅沢に使うのはとんでもないことです。できるだけ節約し足りないところは人力でカバーするのが良い技術者でした。コスト比較では、人が一番手軽な時代でした。

それが、二度のオイルショックを経て、労働者の高齢化とともに省人化、省力化が推進され今日の機械万能の時代を迎えています。思えば、機械化施工に移り変わる節目の時期を過ごし、時代・技術の変遷に出会えた最後の世代であったようです。現在では、できるだけ人手を省くために資機材がふんだんに投入されています。その結果多量の建設廃材も出ています。モノ余り時代の弊ですね。大量消費型社会から資源・エネルギー節約の循環型社会に大急ぎで移らなければならないとつくづく思います。

こうして深山ダムの建設が無事終わりました。これが、ダム屋としての私の出発点です。その後四半世紀、建設省のダム、国鉄(現 JR 東日本)のダム、東京電力のダムとダム一筋に従事してきました。さて、五つ目のダムに出会えるかどうか。120 周年記念誌には、「ダム建設を最後に」で投稿できればと思っています。

1 回しかなかった夏休み

佐藤 準 (昭和 46 年卒)

学園紛争のさなかを過ごした我々の年次は、学業の履修日程が変則であったことが、一つの特徴であろう。

S44 年秋も深まった頃ようやく、長い長い駒場の生活を終え(特に私は 1 年留年したこともあって 3 年半余も駒場に居た)本郷の専門課程に移って来たが、この専門課程は 1 年半しかなかったためか、好きなことに取り組めた期間が本当に短かったと感じている。

S45 年の夏休みには、竹中先生の八郎潟の畑地化の研究のお手伝いで大空の下で悪戦苦闘したり、その後の会津若松での現場実習で、事業計画作りの思いの外の精密さに驚いたり、夏休みのほとんどを費やしたが新しい経験を得たという意味で、私にとっては新鮮で有意義な時間であった。

そして翌年 6 月 30 日に卒業が決まった時に(いつ卒業できるのか直前まで判らなかった)はたと気がついた。あー、専門課程での夏休みは 1 回しかなかったんだと。

学生時代のわずかな思い出

藤村 正 (昭和 46 年卒)

大学時代特に農学部時代の思い出と言われても殆どないといってよい。というのも、昭和 43 年～44 年のストライキの余波を受けて通常 44 年春進学するはずが 44 年 12 月に農学部に進学しており、本郷の生活は 1 年半程度(卒業は 46 年 6 月)だったことも原因していると思う。その中で自分の卒論或いは当時の院生の研究の為に 3,4 日～1 週間程度屋外の調査に同行出来たのは大変な楽しみであった。まずは、授業を受けない正当な理由が出来ること、三食アルコール付きの生活が保障されることが大きな理由だった気がする。当時農業地水学専攻の為、成田、柏崎、北河辺(埼玉)では航空写真による排水不良地域の判別の研究、浜岡(静岡)では砂地での水収支の研究(?)の手伝いだったと記憶しているが、30 年経った今では臆気ながらでしかない。その後、建設会社に入り昭和 58 年～63 年には柏崎で、平成 10 年には浜岡で原子力発電所工事に従事する機会があり、学生時代の調査場所へ行き暫しの感慨にふけたこともある。昨今、環境共生が叫ばれる時代、我々農学を学んだ者が従来にも増して、学生時代の成果を建設会社で活用出来る可能性があると思う今頃である。

田んぼと生態系という身近な課題に取り組中

岩村 和平 (昭和 54 年卒)

卒業して 22 年。ダム現場で技術屋らしい時間を過ごしたり、徹夜続きで予算や制度作りに奔走したり、農家の方々とこれからの農業像や農政のあり方について熱い議論を交わしたり、また、農政の矛盾と農家の苦境を見るにつけ自分の力不足を実感したりしながら結構充実した日々を過ごしてきました。現在、農村環境整備センターに出向し、生態系などの自然環境と調和した整備のあり方についての指針作りを進めています。JABEE 問題でも農業工学の独自性の議論がありましたが、生態系との調和というがミティゲーション技術がまさにそれではないかと思っています。工学部門でも応用生態工学や砂防生態学などの新分野に取り組んでいますが、隙間が埋めきれない状況にあるようです。一方、田んぼや水路は 2 次自然ですから、調整手法を見つけるのは技術的にはまだ射程距離の問題です。更に、現場で使えるようにするには地元関係者との合意作りが欠かせないため、社会的な領域や NPO 活動などの新領域が必要です。まさに農業工学らしい分野の仕事であると思いながら、当センターで支援している「田んぼの学校」活動に参加するため、土日も惜しまず田んぼ周りに出かけているこの頃です。

22 年目の秋(田舎生活の味わいは?)

南斎 好伸 (昭和 54 年卒)

①・4・④・3・3・3・3・⑤

この数字は、小生が栃木県に奉職してから勤務した所属の年数を並べてみたものです。そして、アンダーラインは農業土木(土地改良)以外の職場であり、囲みは出先機関に配属していました。この間、全て自宅から通勤しています。恵まれた職場環境と思う人もあれば、転勤で見知らぬ地を味わえないなんてつまらないと思う人もあるでしょう。人それぞれ、いろんな考えがあるでしょう。

小生、もうすぐ 45 歳になります。45 年のうち、5 年間の大学生活を除くと、栃木の田舎で生活しています。東京とは比べようのない刺激のない生活空間で過ごしてきました。

ここには、四季を感じられる生活があります。メダカの里親活動もしています。最近では壮年ソフトを楽しんだりしています。息子の成長(特に野球)にのめり込んだ生活もあります。こんな小市民的な生活はいかがでしょうか。

4年前、首都機能移転の担当でした。近い将来か、遠い将来かわかりませんが、国会が那須に来るかも知れません。その時、どう思うか、楽しみにしています。(栃木県河内農業振興事務所企画振興室)

21世紀は構造改善局が農村振興局に

勝山 達郎 (昭和53年卒)

アメリカは、1960年代、全体に占める農村人口が40%に減少し農村での農家人口も25%まで下がった。これを背景に、農務省は農業振興に加えて生活環境から医療施設までの整備、教育や他産業の振興など総合的な政策を進めることになった。

一方、1970年代になると減少していた農村の人口は増加に転じた。これは、都市の劣悪な環境から知識人が逃げ出し、それに伴って企業も自然豊かな農村に移転したからである。さらに、それを受け入れる全国ネットの高速道路と、1930年代に連邦政府によって整備された農村道路や水利施設など社会基盤がしっかりしていたことが大きい。ITの先端を走っているシリコンバレーもかつては開発により水と緑が豊かな乾燥地の中のオレンジ果樹園地帯であった。

農林水産省の任務に農村振興が加わった日本は、農村人口の割合でみるとアメリカの1970年頃に相当する。アメリカとは条件が全く違うが同じ転換期であることは事実である。高齢化や情報化がキーワードとなる21世紀の日本では、豊かな水と緑の特色を生かし都市の利便性も備えた農村の構築が重要となる。このとき、伝統と新しさが複雑に交錯すると思うが、過密な都市に子供送りがちな農家が農村のすばらしさを認識する意識改革と誇りの形成も不可欠である。この両方を実現する工学が必要ではないだろうか。

(農林水産省構造改善局 建設部設計課 国営事業調査官)

東大の名誉を守るための努力

李 基明 (昭和55年大学院入学)

農業工学科、生物・環境工学専攻の誕生百周年を迎えられ、心からお祝い申し上げます。

私は韓国の大邱市にある慶北大学の助教授の時、日本文部省国費留学生として選抜され、1979年4月渡日し、夢であった東大で、一生忘れない思い出の農学部四号館(もうなくなったが)での留学生活をはじめました。それは、木谷収先生が東大の教授になって一年たった時と思われる。日本に留学する三年間、またその後いままで木谷収先生をはじめ大勢の方々にお世話になり、お陰さまで韓国での農業機械分野の活躍がもっと活発にできるようになりましたこと、心から感謝しております。

私は日本に留学する前までは、小学校で習った歴史のせいと思いますが、日本に関する先入観が良くなかったのが率直な心情でした。しかし、三年間の留学生活とその後の日本の方々との付き合いを通じて、心持ちが変りました。日本人は人情があり、とても礼儀正しい親切な人と思うようになりました。それは、数えられない大勢の方々から影響を受けましたが、特に東大の農業機械学研究室の木谷収先生をはじめ岡本嗣男先生、山本愷先生、また、農業機械化研究所の三浦恭志郎先生、森本國夫さんは、私の心持ちが変るのに多大な影響をおよぼしました。

学位を取って帰国してから18年になりましたが、その間、留学の前より研究や講義にもっと力をいれて努力しています。それは日本に留学し東大博士の名誉を守るためと思い、夏休みや冬休みに二日以上休んだことは私の記憶にはなかったと思います。また、農業機械分野の韓日交流の窓口的役割を担当し、日本に留学したい人々の留学先の紹介や日本から特別講演にいらっしゃる先生たちの資料翻訳や通訳などは、いまでも年間数回させられています。そのせいで、日本語をわすれずに翻訳や通訳のプロのようになりました。

私は東大の名誉を守るために、また日韓の友好に役立つことを考えながら、何時でも、何処でも、努力していることを東大の生物・環境工学専攻の学問分野誕生百周年を迎え、益々の御発展をお祈りしながら一言述べます。
(韓国 慶北大学校農科大学農業機械工学科 教授)

留学を経て 10 年

足立 泰久 (昭和 56 年卒)

オランダ、ワーケニンゲン大学との共同研究は細々とながらもかれこれ 10 年になる。発端は、箱根で開かれた国際会議に来日した Lyklema 教授と Fleer 教授に巡り合い、色々と話しをしているうちに、農業大学でコロイドの基礎研究を行うことへ共感したからに他ならない。出会いは人生を決める源だと思うが、この出会いによって、留学先が決まり、新たな生活が始まり、研究のレパートリーが広がった。

Lyklema 教授は DLVO 理論の Overbeek 教授の愛弟子で、公職を退いた現在も、DLVO 理論で取りこぼされている拡散二重層の緩和や移動現象の問題に第一線の論文を発表している。一つのテーマへの固執は物凄いエネルギーを感じるが、同時にコロイドの研究室を土や水処理、食品物性や環境分析などの応用へも導き、教授在任中は指導者として手腕を遺憾なく発揮した。留学当初は、スタッフの人数、スペース、設備などに圧倒された。また、町中にはファント・ホフ通りやファン・デル・ワールス通りもあり、市民生活への物理化学の浸透に、底辺から頂点に至るまでどれ一つをとっても敵わんなく(敵う必要が在るか否かは別として)と思ったのが偽らざる心境だった。

ただ、10 年を経て、このような違いについて悲観する必要など殆ど無く、むしろ違いがあればこそ、新しいものを生み出すチャンスが生じるのだと確信するようになった。コロイドのプロパーが知らない水理学を農工で学び、そのことに拘りを持っていたことこそ 10 年の研究展開の大きな糧になった。共感と視点の違いが長続きの秘訣かも知れない。

政界 7 年間の歩み

上田 勇 (昭和 56 年卒)

平成五年、突然政治の道を志して総選挙に立候補し、多くの同僚・友人を驚かせましたが、幸運にも初当選することができました。以来、政界再編や選挙制度改革の荒波にもまれながら、何とか六月の総選挙で三回目の当選を果たし、早いもので国会生活も七年が経ちました。

政界に入ってから、農業土木とは直接関係のない法務委員会に長く所属することになり、本年、法務総括政務次官を拝命しました。臨時国会では、少年法の改正や個人債務者民事再生手続法案など耳目を集める案件に取り組みました。また、これからの法務行政は、「事前規制型」から「事後チェック型」社会への転換に対応した司法制度改革、経済のグローバル化に適應できる商法・民法などの法制度の抜本改革、「人権の二十一世紀」に相應しい政策や制度の整備、少子高齢社会における外国人労働者の受け入れなどさまざまな重要課題に対処していかなければなりません。十二月の省庁再編までの任期ですが、少しでも前進させるよう全力を注いでいく決意です。
(衆議院議員)

地方の時代とは？

小林 祐一 (昭和 56 年卒)

大学の皆様、そして同窓の皆様、御無沙汰しております。
先般、所用があり、東大農学部に久方振り(何年振りかも覚えていない)に行ったところ、余りの変わりように、目的地に辿りつけず、また、昼食を取ろうとしたところ、食堂の場所も分からず、同行した部下

からは、本当に卒業生なのだろうかと疑いの目を向けられ、恥ずかしい思いを致しました。

事程左様に、大学の皆様にも、また同期の皆様にも、再度、大変御無沙汰しております。

さて、小生、現在、本州最北端の青森県に勤務し、地方行政に携わる立場にあり、地方の大学の先生とは、良くお話をすることがあります。その中で思うこと一つ。

それは、最近、役人の世界では、国と地方の役割分担とか、地方分権とかの議論が忙しくなされておりますが、それは大学にも当てはまるのではないかということ。つまり中央の大学には中央の、そして地方には地方のそれぞれの目的なり存在理由があるべきなのであって、ただ単純に、平坦な“基礎的研究”とか言う言葉に隠れてしまう時代ではないのではないかと、ということ。

地方の時代、美しい言葉ですが、その根本は、国とか地方とかに限ったものではなく、誰しもが自らの存在理由を考えることにあるのだらうと思います。そしてそれは役人の世界のみならず、大学の世界にも当てはまるのだらうと。

独立行政法人農業工学研究所へ

上村 健一郎 (昭和 58 年卒)

私は現在、農業工学研究所の企画科に勤務しております。本来、このポストは、研究課題の管理等の企画事務が主たる業務ですが、ここ数年は行政監察対応や組織再編に追われる日々が続いています。今年度の最大のトピックは言うまでもなく独立行政法人化で、私ども農業工学研究所も 2001 年 4 月から独立行政法人として再出発する事となっています。独立行政法人は、財務、組織、人事管理面での弾力的運営や研究評価の強化、透明性の確保などをねらいとした制度ですが、何分、初めての試みですので、機能的な仕組みの構築には様々な課題が山積しています。例えば、定員削減の問題があります。当面、職員の身分は国家公務員として保証される代わりに、定員削減措置の導入が検討されており、そうなれば弾力的な組織運営にも支障が生じる事は必至です。また、研究者個人も組織も定量的な業績評価を受けることとなりますが、評価の実施には適正な評価システムの構築が不可欠です。特に機関評価においては、その評価結果が公開されるだけに、ややもすると地味な研究分野の評価がなおざりになるのではないかと、これまで国の研究機関が果たしてきた地道な役割が正当に評価されないのではないかとといったことを不安視する声もあります。

一方で、独立行政法人化による変化を期待する面も少なくありません。農業工学研究所では独立行政法人化を契機に、農村の社会経済的な研究、景観や生態工学など環境面の研究が強化される予定で、昨年 7 月に制定された食料・農業・農村基本法への貢献が期待されています。また、研究環境についても、研究業績が研究予算や研究者の処遇に反映されるシステムが導入されます。研究課題は、5 年ごとに評価・見直しされ、課題はスクラップ&ビルドで適時性・新規性の高い課題の設定が求められます。より柔軟で創造性に富んだ頭脳が求められ、厳しいけれどやりがいのある研究環境が用意されることとなります。

独立行政法人では、研究者の流動性を高め、優秀な人材を確保することが、極めて重要になってきます。これまでも東大からは貴重な人材を提供頂いていますが、一層多くの東大卒業生が当所に入所頂くことを切に願う次第です。

留学生の思い出

呉 計春 (昭和 60 年大学院入学)

農業工学科が生誕して今年で百年となる。一時期を同学科で過ごしたものとして、この節目を迎える事を大変嬉しく思う次第である。私が在籍したのは、昭和 60 年からの 3 年間で、当時の農産機械研究室において博士課程の大学院生として研究生生活を送っていた。

その頃は、留学生の数が増え、同学科において国際的な色彩が一段と豊かになる時期でもあった。昭和60年に同期で入学した留学生は計3名で、次の年には4名が加わった。そして、学業を終える昭和63年には6名の留学生が入学してきた。当時、同学科には常時10名前後の留学生が在籍しており、そこは私たち留学生にとって単に知識を修得し学問を追求する場だけでなく、互いに異なる国の文化や考え方を交流する場でもあった。もしその経験がなかったら、互いの国の事をこんなに親しく感じただろうかと今でも思っている。

現在、日本 PTC 社のビジネスコンサルタントとして、アジア地域の製造業の企業を対象に IT ソリューションを提供する仕事に従事している。いつか異国の地で留学生生活を共に送った旧友と再会する日を楽しみにしている。

「環境」を拠り所に

権 在永 (昭和 61 年大学院入学)

「環境については、具体的にはどういったテーマを研究しましたか。」某商社人事担当が僕の履歴書を見ながら聞いてきた。1999年5月のことなので、生物環境調節工学研究室を出て10年目に当たる。何故か僕は10年目にして9回目の転職にチャレンジしなければならない羽目になってしまい、マンハッタンは5番街を見下ろすある高層ビルの一室で同担当者に対面していた。「そうですね。確かに環境といっても色々あって、僕は調節の方をやりましたが、基礎研究として、排気・汚水・固体物処理といった一般テーマも一通り研究しました。」腹を据えて答えた。「ウチの機械部が最近環境事業拡大中で、人事募集中なので、それでは部の担当者に会って話しをしてみてください。」ということで、2次、3次面接を経て同社に転職し、今日に至っている。仕事の内容は、果して空気・水・固体物処理全般に取り組みなければならなくなった。実は大学時代は環境といっても廃棄物処理とは無縁であった。一応温室の研究ということではあったが、アルバイトに精を出していた。卒業後担当先生の紹介でアメリカに渡り、それからというもの4ヶ国の9社を跨って転々としてきた。自分の意志で動いたのである。今度こそ落ち着かねばと思っはいるが、気が付いてみるとネットビジネスの方に既に脱線しており、軌道に戻る迄には今暫く時間がかかりそうなのである。

TODAI, YAYOI CAMPUS, YON GOKAN

Budi Indra Setiawan

(Entered into the Graduate School, 1988)

TODAI, YAYOI CAMPUS, YON GOKAN, how can I forget the bitter and sweet memories of my life. There was a time wandering. A man with a dispersed dignity but determined to go on with one hoping there would be a light. Just to see the path for not stepping aside. The burden was felt extraordinary. Feeling tired was one of everyday menu. But, it was no time to stop even to sweep my sweat. Fortunately, the destination was coming closer when I realized that all the surrounding honored people and the conducive environment provided me a wide opened highway. Even, there was time I had a chance to jump forward. I got what I wanted. The reality of my dream. You have given me a chance. Of cause, you are not only school for me but you are also my home of pride. I am a part of you and definitely, I understand why everybody wants to be a part of you. Because, you are deserved to be the best. This will last forever. I guarantee. Happy 100 Anniversary.

(Head of the laboratory of Human and Bioenvironment Control Engineering (Ergotron), Department of Agricultural Engineering, Faculty of Agricultural Technology, Bogor Agricultural University)

ゼミのテーブル面にジグソーパズル

王 益平 (昭和 63 年大学院入学)

昨日、娘とアンパンマンのジグソーパズルを遊んだ。この遊びは、生物プロセス工学(旧農産機械学)研究室の博士コース在学中、仲間と一緒に楽しんだことが記憶に残っている。先輩の松田さんがジグソーパズルを買って、遊ぶように誘ってくれた。500 ピースはわりと簡単にできたが、1000、2000 ピースには相当な時間がかかった。5000 ピースとなると、完成品が A0 製図紙よりも大きいので、並べるスペースが大きな問題となった。ある日、誰かが「ゼミのテーブルは週に 1 回しか使わないので、その上でやろう」と言って、ゼミのテーブル上の大作戦を繰り広げた。勉強は本業なので、一応昼食後に限ってやることにした。しかし、一旦やり出したら、面白くてピースをなかなか離せず、2 時間も 3 時間も並べ続いた。あまりにも長時間で先生に怒られそうになったが、5000 ピースの大作を皆で完成した。

この間、アメリカで Photomosaic を見た。これは、細かくばらばらにした絵や写真をつなぎ合わせて元どおりにするジグソーパズルと違って、模様の異なる小図案を選び、巧妙に並べてイメージどおりの絵に完成する芸術である。シカゴ産業技術博物館の壁に陣列していた切手で作り上げたダイアナ妃の像は実にリアルで美しいものであった。

Congratulations from Sri Lanka!

Harsha Liyanage

(Entered into the Graduate School, 1989)

It is 12 o'clock midnight in Colombo, Sri Lanka. My three kids are sleeping now, and I am still busy with final touches of a new proposal on environment education. Six years ago, in 1994, at 12 o'clock midnight I would have been at the desk of our lab in Kankyoken, completing the research work on carrot somatic embryo (tissue culture), to fulfill my PhD. (Well, I didn't have kids then). Though, time is 12 o'clock, the experiences are two different.

During the lonely ours, even today I can't stop the floating sweet memories of that student life of the lovely place called Kankyoken of Nogakubu, at Todai. The lessons learned, the experiences gained are so amazing, which has been decorating my carrier throughout since then and which will continue to do so in rest of my life. Because, it is so intensively ingrained into my blood stream & the nerves system.

Today my contributions are made to my country as an administrator of a leading NGO called Sarvodaya, as an academic at Universities and as an adviser to various government run projects, the lessons learned at Kankyoken are in action to deliver services for a tiny nation of 18 million people. Thank you Kankyoken and you can certainly be proud of your contributions to the whole world. Good luck for another 100 years of services!

LIFE AFTER TODAI

Orlando F. Balderama

(Entered into the Graduate School, 1994)

After four years of intensive study, I was finally bestowed a doctoral degree in Agricultural Engineering in 1998 under the advisorship of Prof. Ryota Nakamura of the Laboratory of Water and Environmental Engineering (formerly Irrigation and Drainage Laboratory). It is the greatest honor in

my career to achieved this advanced degree from the best university in Asia and Pacific.

Right after, I returned to the Isabela State University (ISU) in the Philippines where I have been working since 1986 and the one responsible in sending me to study in Japan. It has been my obsession that the new knowledge and experiences learned in

TODAI be used to help develop ISU. My young university is so proud to produced her first Doctor in Agricultural Engineering from Tokyo University! Two years after TODAI, I can only described my career at ISU as one that is "extremely fulfilling" . Aside from teaching, Research and Development has been my main concern . I am presently working on a program to establish an Integrated Water Resource Program in the Northern Luzon Region of the country with components on irrigation and potable water supply and watershed management.

My congratulations to the 100th year anniversary of our department !

生物・環境工学の更なる発展に向けて

齋藤 広隆 (平成 7 年卒)

アメリカに来て 2 年と少し．細かな苦勞はあるものの，これまでのところ充実した生活をミシガン大学で送っています．このたびは生物・環境工学(農業工学)創設百周年おめでとうございます．私が生物・環境工学(環境地水学研究室)に学んだのはアメリカに来る前の 5 年ほどであります．この間に生物・環境工学は劇的に変化をしたように感じます．その中でももっとも印象深いのが現 7 号館の完成です．旧 4 号館の剥き出しのコンクリート壁を懐かしんだこともありましたがやはり新しい建物はいいものだと学生一同喜んだものでした．そして時期を同じく学科名の変更，生物環境情報工学研究室の設立があり，大学院重点化に伴い，大学院生が急に増えたと記憶しています．このような発展，拡大は非常に喜ばしいことですが，継続的な発展には教育機関としてのさらなる充実が不可欠かと思えます．アメリカいると大学の質は教育にありということを強く意識させられてしまい，多少偏った見方になっているかも知れませんが，日本を代表する大学として、生物・環境工学が研究機関としてのみでなく教育機関としても更なる成長を遂げられていくことを一卒業生として願っています．(ミシガン大学環境工学科)